
チェリー・OH！ ベイビー

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チェリー・OH！ ベイビー

【Nコード】

N5797D

【作者名】

りきてつくす

【あらすじ】

キュートで超わがままなチェリーお嬢様は今日もご機嫌。でも彼女を取り巻く騎士や海賊たちは大パニック。剣と魔法と近代兵器が入り乱れた、どたばたファンタジーです。

ブルームーンの場合、恋人よそばにいて（前書き）

こんにちわ、りきてつくすです。この連載を再開するにあたり、第1話から新しく書き直すことにしました。以前にお読み下さった読者様、ほんとに申し訳ございません（土下座っ！）

ブルームーンの場合ゝ恋人よそばにいて

ガーネット色の夜空に、閃光が煌めいた。

乾いた破裂音が数発、澄み渡った夏の夜気を震わせると、まるで万華鏡をのぞき込んだときのように色とりどりの光の花びらが、星空のスクリーンいっぱいにひろがる。

夏の風物詩、川辺の花火大会……。

天をつらぬく幾筋もの光芒が、夜目にも美しい大輪の花へと姿を変えるたび、辺りからわあっと歓声が上がる。

白いのどを反らして宵空を見上げるあたしの艶やかな洗い髪を、優しい夏の夜風がそつと撫でていった……。

今日はコロンを変えてみたんだ、彼つてば、ちゃんと気付いてくれたかな？

ちらと、横を見る。

涼しげに微笑む恋人の目には、刻々と色彩を変えてゆく光の点滅だけが瞬いていた。

あたしは、なぜだかちょっぴり切なくなつて、浴衣の下にそろえたヒザの上に視線を落とす。さつき夜店で買つてもらつた水玉模様のヨーヨーが、手の中でちゃぷんと音を立てた……。

不意に、彼の手があたしの肩に触れた。

あたしは、はっとして彼の顔を見る。その涼しげな瞳の中には、ロケットの中に秘めた恋人の写真みたい、戸惑つたあたしの顔が映っていた。

やだっ、どうしよう……。キスとかしそうな雰囲気になっちゃっ

たらどうしよう……。

「……中隊長殿？」

うるさい。

彼が、あたしの肩に優しく手を回してきた。あたしってば、嬉しくてたまなくせに、ちょっとだけ拒むような素振りを見せたんだ。だって、大好きな彼に、軽い女だなんて思われたくないもん。今夜は、あくまで純情可憐な女の子を演出して、彼の嗜虐的な欲望に火をつけてやるんだ。

君、とっても良い匂いがするね……、なんて言いながら、彼があたしの洗い髪の中にそつと顔を埋めた。

ああ、どうしよう……、この分だと、もしかしたらキスだけじゃ済まないかも……。

「ちゅ、中隊長殿」

もう、うるさいってば。

彼の指が、あたしのセミロングの髪をそつとかき分け、白い貝殻みたいな耳に息が吹き掛かるほど唇を近づけてきた。

好きだよ……。

そう囁いて、イタズラっぽい目で、真っ赤になったあたしの耳たぶをそつと噛んだ。

あん……。

あたし、もうダメだ……。恥ずかしい声が喉の奥からもれてしまった。

エッチな女の子だ、なんて思われたんじゃないかな……？ でも、彼が悪いんだぞ、変な事するから。

ついに彼が、少しだけ顔を横に傾けた。間違いない、これって絶

対キスの体勢だ！ やだっ、どうしよう……。ドキドキ、ドキドキ……。

こんな事もあるつかと、今日は、何度も何度も念入りに歯を磨いてきたんだ。でも、待てよ……。？ 昼に食べたチーズピザのにおいが残ってたらヤバイぞ。たしかガリリツク風味だったよなあ……。そんな事を考えているうちに、彼の唇があたしの唇の上に……。ああっ、もうどうにでもしちゃって！

「中隊長殿ーっ！」

あーっ！ もううるさいなあ、せつかく現実逃避してたのにーっ。

テレビのスイッチが切られるように現実世界へと引き戻されていたあたしの真ん前には、老いた下士官の焦燥しきった顔があった。うげ……。

「如何しました、中隊長殿？ 先程から心ここにあらず、といった感じでしたぞ」

「あ……。打ち上げ花火が」

「しっかりして下さい、あれは、敵の迫撃砲です！」
「分かってるよーっ、もう……」

前線司令部のあるモスグリーンの野営テントには、貫通した銃弾の跡が幾つもあいていて、近くで迫撃砲が着弾、炎上するたびに、その穴からプラネタリウムみたいに閃光が差し込んでいた。

夜のとばりが下りて間もないこの鬱蒼とした密林には、しかし深閑とした森の静寂はない。そう遠くない場所に展開している味方陣地からは、もう半日以上も断続的に爆発音や兵たちの悲鳴が聞こえてくるのだ。

そう……。ここからは花火なんて見えやしないし、恋人だっていない。

だって、ここは戦場なんだから……。

あたしは、長いまつ毛を伏せ、深いため息をついてから、傍らに積まれた段ボール箱に手をつ込んで、カップラーメンを一つ取り出した。ぺろんとフタをめくり、ポットからコボコボとお湯を注ぐ。半年前、王城から出撃して以来ずっとあたしに付き従ってきた老下士官のライマー軍曹が、すかさず割りばしを差し出した。うーん……阿吽の呼吸ってやつだね。いや、条件反射というべきか。

彼は、気をつけの姿勢を保ったまま、苦り切った表情で報告した。「先ほどアリーヤ特務曹長から報告がありまして……、昨夜のうちに、半数以上の味方魔法兵が脱走したとの事です」

「ふん、これだからエリートは……。いくら魔法学校を優秀な成績で卒業したといっても、ちよつと戦況が悪くなつたとたん浮き足だつちやつて、根性ないんだから、もう！」

ほんとは、ちよつとなんてもんじゃない。

あたしが国王陛下からお預かりしているこの歩兵中隊は、あのセクハラ司令官の陰謀で、ほとんど作戦らしい作戦もないまま最前線に送り込まれ、もう玉砕寸前の状態にあったのだ……。

くっそーっ、近衛騎士団長のジョバンニめ！あたしのお尻を触った事を軍法会議にかけてやると言ったら、すかさず前線に飛ばしやがって。

この借りはいつか必ず返してやるからなーっ。

「きゃあっ！」

突然、もの凄い爆発音とともに地面が揺れた。テントの隅にうずたかく積まれていた弾薬の箱がガラガラと崩れ落ち、折り畳み式の長テーブルとパイプ椅子がひっくり返った。どうやら、敵の放った迫撃砲がすぐ近くに着弾したらしい。

あたしは、尻餅をつきながらも、お湯の充たされたカップラーメン

ンだけは必死になつて守り抜いた。

「中隊長殿っ！お怪我はありませんか？」

「うん、無事だった」

さっさと食べてしまおう。

「ここは、今や敵の恰好の標的となり、かなり危険な状態です。いったんデマヴァンド山まで後退しては如何かと思いますが？」

「うーん……、でも勝手に退却したりしたら、ジョバンニのじじい以後で何を言われるか……」

そのとき、通信兵がヘッドフォンを外しながらあたしに呼びかけた。

「中隊長殿っ」

「あーっ、もう！うら若き乙女に向かって、その”中隊長殿”つてのは止めてくれないかなーっ。せめて、騎士様とかブルームーン様とか……」

「ジョバンニ司令官より入電です
げっ！

あたしは、いやーな予感を抱きながらも、食べかけのカップラーメンをそつとテーブルの上に置いて立ち上がった……。

つつく……。

ブルームーンの場合、最前線エレジー

「ふざけんな、ばっかやろーっ！」

あたしは、怒りにまかせヘッドフォンを地面に叩き付けた。ライマー軍曹が狼狽しながら訊ねる。

「い、いかなさいました、中隊長殿……？」

「ちつくしょー！　ねー聞いてくれるー？　ジヨバンニったら、あたしたちにミイムル川の鉄橋を奪還しろなんて言っただよー。もお！　ムチャな命令ばかり下しやがって、あの野郎……」

あたしが涙目でそう訴えると、歴戦の勇士であるこの老いた下士官の厳つい顔もさすがにサーツと青ざめた。

「な、何ですと？　あの橋を守るのは敵の精鋭、第七魔法連隊ですぞ。強力な味方魔法兵の援護があるならともかく、我々歩兵部隊だけであの橋を落とせるとも……」

「分かってるよーっ。でも命令だから仕方ないじゃないかあ」

あたしは、もう何日もルージユを引いていない唇をきゅっと噛みしめた……。

しばしの沈黙を破って、ライマー軍曹がしぼり出すような声で言った。

「……軍人らしく、最後は潔く散りますか」

ふ、ふざけるなっ、バージンのまま散ってたまるか！

「待って！　もう一度ジヨバンニに掛け合ってみる。なーに、へりくだってワビを入れてやりやあ、あの冷血漢だってきっと哀れに思っただけで撤退させてくれるさ……ははは」

ウソだ……、近衛騎士団長ジヨバンニ・カエサルは、そんなに甘い人間じゃない。テレビの時代劇に出てくる悪代官よろしく、前線

から撤退させることを条件に、あたしに肉体関係を迫るなんてこと、朝飯前でやってのける男だ。

おぬしも悪よのう。

ジョバンニのいやらしいヒゲ面を思い出して、あたしの牛乳プリンみたいな玉の肌につつと鳥肌が浮き上がった。

えーん、嫌だよう……。

ボロロン……

そのとき、テントの外からアコースティックギターを爪弾く音が聞こえた。

誰だ、こんな時間に？ いや、時間の問題じゃないか。

ボロロンボロロンロン……

そのギターは、最初ロドリゴの『アランフェス協奏曲』を弾こうとしたらしいが、途中から『湯の町エレジー』みたいになってしまっていた。

微妙に音外してるし……。

「誰なの？」

あたしは、失望と嫌悪を込めて、傍らに置いてあった騎士剣の柄を握りしめた。

「ちよつと失礼するよ……」

そのとき、一人の男が窮屈そうに背中を丸めながらテントの入り口をくぐってきた。とたんに湿気った外気が内部に流れ込み、蚊取り線香の煙がほわんと揺らめく。

その男は、くたびれたハンティング帽をかぶり、無精ひげに覆われた口の端に火の付いた煙草をだらんとぶら下げていた。褐色に焼けた顔は、精悍で彫りが深いが、ひび割れたメガネがだらしなく

ずり落ちた面貌からは、何だか貧乏くさい印象を受ける。

うーん、イケメンとまではいかないけど……、まあ、ちょっとだけイー男ってとこかな。

無遠慮にズカズカと入り込んでくるこの野卑た男の前に、ライマ
ー軍曹が颯爽と立ちはだかった。

「何だ貴様はーっ？」

「俺かい？ 俺は、プレオの街で雇われた傭兵さ……」

「ここは、前線の司令部だ。貴様のような傭兵風情が、気軽に立ち
入れる所ではないのだぞ。ここに何の用だっ？」

左足をわずかに持ち上げ靴底で煙草の火を揉み消すと、その男は
几帳面にも吸い殻を携帯灰皿に収めながら言った。

「どうも、あんたがたの戦況が芳しくないようなんですね、契約を解
除してもらおうと思つてさ」

傭兵の男は、ずり落ちたメガネを人さし指でくいつと上げながら、
にやけた顔で言った。ライマー軍曹が、こめかみに血管を浮き上が
らせながら嘲るように鼻を鳴らす。

「ふんっ、貴様ら傭兵なんぞ、ハナっから当てにしてはおらん。さ
つさとシッポを巻いて我々の前から消え失せろ！」

しかし男は、口の右端をにいつとつり上げて笑った。

「いやあ、さっきまでそのつもりだったんだがね、すっかり気が変
わっちまつてさ。ここの中隊長さんが、こんなに可愛いお嬢さんと
は知らなかったもんで……」

可愛いお嬢さんという言葉に、あたしは素早く反応した。あたし
つてば、この手のお世辞にはめっっぽう弱いのだ。きつと、悪い男に
だまされて一生苦労するタイプかもしれない……とほほ。

「き、貴様ーっ、中隊長殿に向かつて！」

軍曹の鉄拳制裁がぶうんと飛んだが、彼はそれをひよいと軽くか

わしていおて、何事もなかったかのようにあたしの前までやってきた。

「きれいな金髪だな、ケルトか？」

「え……？ うん、ちよっぴりガラティア混じってるけど……」

な、何、このシチュエーションは？ ひよっとして、ラブロマンスの始まり？ …… って酒くさいぞ、てめーっ！

「ちよつと、あんた酔っぱらってるでしょ？」

「うん？ ああ、俺は四六時中酔ってないとダメなんだ」

「そーゆーのを、世間ではアル中ってゆーんだぞ！」

「ははは、怒った顔もまた可愛いな。俺は、ミッキー・三木ってんだ。さっきの話は立ち聞きさせてもらったが、まあ、俺に任せておけば大丈夫。ムイムル川の鉄橋なんか、俺たちだけで取り返してやるよ」

そう言うつとミッキー・三木は、くるつと踵を返しさつさとテントから出ていった。出がけに軍曹の肩をポンと叩いて、

「明日の昼前に出立すれば、夕方にはムイムル川の上流に着くだろう。夜襲をかけるから照明弾と、あとゴムボートを数隻用意しておいてくれ」

とニヒルな顔で笑った。

「ちよつと待つて、あたしも一緒に行く！」

「ほう、中隊長さんも来てくれるのかい？ そりゃ嬉しいね。美しいジャンヌ・ダルクと一緒にあ、兵士の士気も上がるってもんだ」

「一応、前線の指揮官だからね。それとあたしの事は、ブルームーンって呼んでくれていいよ」

「ブルームーンか、うん、いい名前だ」

そう言つて真つ白なギターを肩に担ぐと、右手の指2本でちゃんと敬礼してから、ミッキー・三木は、背中を向け闇の中に消えていった。

ちくしょー、気取りやがって……。何だかむしょーにム力つくけど……でも、妙に心惹かれてしまっただよなあ。

「分かってくれる？ この複雑な乙女心！」

思わず口に出してしまった。驚いたライマー軍装は、びしっと気を付けの姿勢をして、

「はっ、私には、分かりかねます！」

と返答した。……なんて律儀者なんだ。

「あいつ、信用できると思う？」

「さあ、どうでしょうな。しかし傭兵というものは、ビジネスで戦ってますから、案外報酬に見合っただけの働きはするもんです」

「……………いくら払ったの？」

「1人に付き1万ゴールド」

「えーっ！」

「あと、ギルドへの紹介手数料として、その3割増し」

「どえーっ！ ライマー、お前って、もしかしてバカだろー！？」

こりゃ、何としても鉄橋を落とさないと、国王陛下に顔向けできないぞ……とほほ。

あたしは、99パーセントの不安と残り1パーセントの期待を胸に、寝心地の悪い鉄パイプの簡易ベッドにごろんと横になった。

つつく……。

ブルームーンの場合、明日に架ける橋

その光景は、まるで不夜城だった……。

ムイムル川の鉄橋を守る敵の野営駐屯地には、索敵用のサーチライトが縦横無尽に交差して、それはまるでナイトクラブの天井に吊されたミラーボールみたいに幻惑的に夜の闇を照らしていた。

その鉄条網で囲われた広大な敷地には、夜目にも分かるほど真っ白い炊煙が星空を衝いて、幾筋も、幾筋も立ち上っていた……。

「ね、ねえ……、敵の数って、およそどれくらいなの……？」

あたしは、これから死闘を繰り広げるであろう敵の巨大さに改めて驚き、思わずビビってライマー軍曹にそつと尋ねてみた。これだけ炊煙が立ち上っているところを見ると、相当数の兵があ野営地に駐屯している事は間違いない。

ライマー軍曹が、手にした双眼鏡から目を離し、鼻の頭をぼりぼり搔きながら困ったような顔で答える。

「正確な数字は把握しておりませんが……、まあ、2千5百から3千といったところでしょうか……」

「えーっ！ あたしたちの十倍以上の兵力じゃないかあ！」
帰ろかな。

昼前に前線基地を進発したあたしたちの部隊は、夏の太陽が西の彼方、デマヴァンド山の稜線にわずかに夕日の片鱗を残す頃合いになって、ようやく目的地であるこの丘陵にたどり着いた。この丘の西側斜面を下ったところには、急カーブしたムイムル川が、こちら側にぐつとせり出していて、敵に見つかることなく渡河するには絶好のポイントとなっている。

まず別動隊が川を渡って敵の背後に回り込み、頃合いを見計らっ

て本隊が正面から突撃、敵を挟み撃ちにしようというのが今回の作戦なのだが……。

「ねえ、ミキ・ミキ……」

「俺の名は、ミッキー・三木だ」

ミキ・ミキが人さし指でずり落ちたメガネをくいつと持ち上げ、ちらとあたしの顔を一瞥した。

「たいして変わんないじゃん！ いや、そんな事よりさ、別動隊の連中うまくやってくれるかなあ。どーも、血の気が多くて掩蔽行動には向かないような連中ばかり、あっち側に行っちゃった気がするけど……」

「心配するな、あいつらは百戦錬磨の傭兵どもだ、ゲリラ戦なんかは、それこそ得意中の得意……」

ミキ・ミキがそこまで言いかけたとき、

シタタタタツ　シタタツ　シタタタタタツ……

暗碧とした夜の森に機銃音が響き渡り、夏の夜空に光の尾を引きずって数発の曳光弾が飛び交った。

「しまった、別動隊が敵の伏兵と遭遇したか！」

「えーっ、だから言わんこっちゃないっ。どーすんのよー、もう！」「くそっ、こうなったら仕方がない。玉碎覚悟で全員突撃だーっ！」

ミキ・ミキは、立ち上がってみんなに呼びかけた。正規兵の半数以上が逃亡し、その不足分を荒くれの傭兵どもで補っていた歩兵部隊は、待ってましたとばかり喚声を上げた。

「おーっ！」

「やっつたるぜーっ！」

「お、おい、こらっ！ ちょっと待て、ミキ・ミキ！ そんな、行き当たりばったりの作戦ってあるか！」

あたしが止める間もなく、ミキ・ミキは2百人あまりの歩兵部隊を引きつれ、怒濤のごとく大地を踏み鳴らして敵の野营地めがけ突進していった。

「勝利を我らに！」

「アッラー・アクバル！」

……ど、どこの国から来た傭兵だ？

漆黒の闇の中、銃声とともにチカチカと閃光が煌めき、ときおり手榴弾の凄まじい炸裂音が轟きわたる。たちまち、敵地からもけたましいサイレンの音が鳴りわたり、やがて天地を焦がすような魔法と重火器の応酬が始まった……。

「ど、ど、どうしよう？　ねえ、ライマーってば……。やっぱここは、指揮官として全兵に撤退を命ずるべきだね、ね？」

あたしは、涙目になってライマー軍曹に賛意をもとめたが、彼は悟りを得た賢者みたいに重々しく言った。

「もう、どうにもなりません……。こうなっただからには、最後は軍人として潔く……」

だから、バージンのまま散るのはイヤだってば！　そんなに散りたきゃ、お前一人で散れよ……。

尖兵は、すでに血ミドロの死闘を繰り広げていた。

敵の火炎魔法でこんがりの良い具合に焼かれる者、風刃魔法で金太郎飴のように切り刻まれる者、氷結魔法で等身大のフィギアみたいに固められるもの……。

「あわわ、大変だ！　あたしが国王陛下からお預かりしている大事な兵たちが……」

絶体絶命の状況下で、あたしは緊張のあまり思わずパンツにじわ

つと染みをつくってしまった……ような気がした。

どうして……どうして、あたしみたいなうら若くてキュートでしかも魅力的な女の子が、こんな七難八苦を重ねなくちゃなんないの……？

あたしは、陛下から歩兵中隊長を命ぜられ、王城を出撃してより今日までの辛酸をなめるような苦難の日々を思い出し、何故だかふつと怒りが込み上げてくるのを感じた。いわゆるヒステリーってゆーやつ？

よく分かんないけど、もんのすごく頭来たーっ！

「よ、よーし……見てろよーっ！ 女の子が、いったんケツまくつたらどんな恐い事になるか、思い知らせてやるーっ！」

あたしは、陛下より拝領した騎士剣をすらりと抜き放つと、そのオリハルコン製の刀身を、吸い込まれそうなほど耀く星空に向かって高々とかかげた。

あかぎの山もこよいかぎり……などとバカなこと言ってる場合じゃない！

「みんなーっ、あたしに続けーっ！」

「おーっ！」

ライマー軍曹以下、体育会系バリバリの歩兵部隊を従え、あたしは猛然と斜面を駆け下った。

戦況は、十倍以上の兵力差があるにもかかわらず、一進一退を繰り返していた。

でも、ミキ・ミキって凄い！ さすが、でかい口叩くだけの事はあるね。

彼は、軽機関銃を腰だめに乱射しながら敵の只中に突っ込んでいくと、すかさず軍用トラックをかつぱらい、それを部下に運転させながら自分は荷台の上に乗って、敵の頭上に手榴弾を雨あられとばらまいている。

ミキ・ミキって、もの凄くクレイジーだ！

あんなアブナイやつとは知らなかったよ。とりあえず恋人候補のリストからは外しておこう……。

よーしっ、こっちもガンバルぞーっ！

あたしは、騎士剣を眼前にかざすと、呼吸をととのえ古代ケルト語の呪文を長々と唱え始めた。

やがて、周囲の空間がぐにやりと歪み、陽炎が立ち上るように景色がゆらゆらと揺れ始める。つーんとオゾンの匂いがただよい、わき出す光の粒子が、アゲハチョウの鱗粉みたいに5色に煌めいて、あたしの周りをぐるぐると回転し始めた……。

やがてあたしは、眩いほどの神聖な光のオーラに包まれていった……。

見たか！ 騎士の称号を得たものだけが使うことを許される聖霊魔法、ホーリー・プロテクションだ！

これで敵の攻撃魔法はあたしには効かないぞ！ まあ、おかげでこっちも魔法による攻撃ができないけど……。

とにかく、こっから先は怒濤の肉弾戦だ！ 総員、突撃ーっ！

つづく……。

ブルームーンの場合、戦場ブギウギ

飛び交う銃弾は、鎧をうがち、心をつらぬき、勇気をくじく……。
吼え狂う魔法は、軍服を焼き、理性をうばい、憎悪を燃えあがらせる……。

戦場で演じられるコマは、まるで地獄変のよう……。

でも、あたしは戦う。戦い続ける。だって、騎士だから……。

近衛騎士として王に忠誠を誓ったその日から、女としての幸せを捨て戦場に生きる覚悟を決めたんだ……。

だから、あたしは……あたしは……。

「中隊長殿ーっ、ひょっとして、また何か現実逃避しようとしておられませんかー？」

ギクッ！ す、するどい……。ライマー、お前ってホント、人間観察するどいよ。

「この戦争が終わったら、さっさと除隊して占い師なんか始めたらどう？ 評判になると思うよ」

「それは、ちょっと無理ですなあ……。昔から、若いおなごは苦手なもので」

あ、あたしだって一応、若いおなごの端くれなんだけど……。

ムイムル川の鉄橋をめぐって激突した両軍は、歩兵と魔法兵、双方入り乱れて上よ下よの大乱戦を繰り広げていた。

当初、敵を挟撃しようとしたあたしたちの作戦は失敗したけれど、夜襲そのものは上手く効果を上げたみたい。鎧袖一触とまではいかないものの、我が歩兵中隊はこの夜戦をなんとか優位に戦っていた。

国王陛下、あたしガンバツテます！

魔法兵は、基本的に白兵戦が苦手だ。

なぜなら強力な魔法を発動するためには、それに見合うだけの長
つたらしい呪文^{スベル}を詠唱しなければならいからだ。その点、剣はた
だ振り回せばいいし、銃はトリガーを引くだけで自動的に弾が出る。
接近戦においては、この差って大きいよね。

ま、あたしみたいに有能な騎士は、どっちもそつなくこなすけど。

なんてちよっぴり自画自賛していたら、突然フレイルを振りかざ
した敵兵が側面から襲い掛かかってきた。

この愛らしいファニーフェイスに傷をつけようってかあ？ 罰当
たりめ！

「死いねえええーっ！」

な、なんて下品な掛け声なんだ……。

敵の振り回すフレイルの鋼鉄製チェーンがぶーんと唸りを上げて
あたしに迫る。チェーンの先には金平糖みたいにトゲトゲした鉄球
がぶら下がってて、当たったら超痛そう……ってゆーか絶対死ぬっ！

あたしは、新体操選手みたいに華麗なステップをふんでその攻撃
をうまくかわすと、電光石火のはやわで騎士剣をひゅんと一閃さ
せた。

「えーいっ！」

バッコーン！

「ぐわあ……」

重たい鎧をまとった敵の兵は、目から火花をちらしながらスクラ
ップ工場に積まれた鉄くずみたいにその場にぐしゃりと崩れ落ちた。
いっちょ、上がりっ！

しかし休む間もなく、背後の暗闇から新手の敵があたしに向けて
長槍を突き出してきた。その研ぎ澄まされた槍の先端が氷柱みたい
に冷酷な煌めきを放ち、しゅっと風を切ってあたしのスリムかつグ

ラマラスなナイスバディに迫る！

「くたばれええーっ！」

なんて稚拙な掛け声なんだ、お前らボキャブラリイ貧困の権化か……？

あたしは、バレリーナみたいに可憐な身ごなしでくるくると槍の横をすり抜けると、そのままの勢いで騎士剣をふり回し、渾身の力を込めて敵の兜をぶっ叩いた。

「やーっ！」

ベッコーン！

「うへえ……」

またしても敵は、目からパチパチつと火花をちらしながら車にひかれたカエルみたいにその場にぺしゃんと伸びた。

「……ライマー、あたしお腹減った、少し休憩しよう」

あたしが、じわつと目に涙を浮かべてそう訴えると、この老いた下士官は、腰をぐつと落とし、敵が密集している辺りに狙いをさだめてグレネード・ランチャーをバヒュン！と一発ぶち込んでから面倒臭げに言った。

「携帯用の食料は尽きました。何か食べたきゃ、この戦闘に勝利して基地に凱旋して下さい」

「あー、冷たいんだー、その言い方ー」

次の瞬間、ドゴーン！と銃爆音が轟き、黒煙とともに数十人の敵がいつぺんに吹き飛んだ。

それにしても、敵はいったい何人いるんだ？ もう相当数やつつけたはずなのに一向にその数を減らす気配を見せないじゃないかあ。まーったく！ ボウフラじゃあるまいし後から後からうじゃうじゃと……。

「ねえ、ライマー。あたしたち、もうかれこれ半数以上の敵を掃討してるよね？」

ライマー軍曹は、迫り来る敵の一団に向かってサブマシンガンでシユタタタッ！と掃射しながら答えた。

「いやいや、まだ4分の1くらいでしょう」

彼の銃口が火を吹くたびに薬莢が景気よく飛び散り、夜店の射的場に並んだ景品みたいに敵がパタパタと倒れ伏す。

「うつそーっ、まだ4分の1？ ひえー、あたしもうダメだあ……」

あたしは思わず騎士剣を放り出したい衝動にかられた。

軍人になんか、なるんじゃないかった……。

騎士になるって言ったらパパとママ、猛反対したっけ、なにバカな事言ってるのって……。両親の忠告を素直に聞いておけばよかったんだ、あたしって親不孝……。

大人しくOLでもやってりゃあ、いまごろ合コンかお見合いパーティーで素敵なお彼氏をつくって、夜景を望むお洒落なマンションで二人がけのソファーに並んで、ラブラブいちゃいちゃ……って違う違う！

あたしたち軍人が敵の侵略から祖国を守っているからこそ、みんなが安心して、合コンに、お見合いパーティーに、夜景を見ながらラブラブいちゃいちゃ……。

ちつくしよー、あつたま来たーっ！

あたしは騎士剣を構え直すと、群がる敵に向かって猛然と突進した。

「お前らが悪いんだーっ！ いきなりひとの国に攻め込んで来やがって、みーんなみーんな、お前らのせいだーっ！」

あたしは、剣を振りかぶると防御体勢をとる敵の真っ只中へと突っ込んだ。

ちなみに、自慢じゃないけどあたしは刃物が嫌いだ。だって野蛮でしょ？ 刃物で人を切るなんて。

よって、この剣は刃引きにしてある。人間はおるか、カステラだ

って切れやしないんだ。

そーゆーわけで、あたしは敵を……。

「この剣で殴り倒すのさーっ！」

ぼっこーん！　べっこーん！　ぼっこーん！　ぎっこーん！　が
っこーん！

あたしが矢のように走り抜けたあとには、ボーリングのピンみたいに跳ね飛ばされた敵がごろごろと地面を転がった。

うーん、われながらすごい破壊力……　ってもう体力の限界だあ。

「ひーん、これじゃキリがないよあ……。いくらオリハルコン製の剣が軽量だからといって、こうブンブン振り回してちやさすがに疲れるし、二の腕が太くなったら困る！　もし、あたしがイブニングドレス着られない体になってしまったら一体誰が責任取ってくれるんだあ！」

あたしはその場にぺしゃんと座り込んだ。

「もう絶対ムリ……　甘いものが食べたい……………」

戦闘不能におちいったあたしを見て、ここぞとばかり得物を振りかざした敵が殺到する。あたしは、目を閉じて覚悟を決めた……。

なーんだ、あたしってばこんな所で死んじゃうんだ……　この世に生まれ出て１８年、思えば短い人生だったなあ……。

シャー・ナーメ教会の司祭様は、あたしを見るなり

「君は、どう見ても間違いない長生きするよ、わっはっは！」

って大笑いしたけど、思いっきり早死にじゃないかあ、ほんと神様って当てになんないよね。

唯一の心残りは、バージンのまま逝くこと……　きつと天国でバカにされるんだろうなあ……。

なんて考えながら自分の半生を走馬燈のようにふり返っていたら、

車のヘッドライトがあたしに急接近してきた。やって来たのは白馬の王子様ならぬ、軍用ジープを乱暴に乗り回す傭兵のミキ・ミキ。

「おい、ブルームーン！ こっちだ、こっち、早く乗れ！」

「……あたし、もうダメ、動けない」

「なに言っただ、だらしない！ ほら、これをやるから大人しく言う通りにしろ」

見ると、ミキ・ミキの手には、敵の食料庫からくすねてきた袋詰めのアンパンがぶら下がっていた。あたしは、加速装置を作動したみたいに素早くジープに飛び乗った。

「わっ！ それ、ちょうだい」

その直後、あたしがへたり込んでいた辺りの地面に、ぶずぶずぶすつと無数の刀槍が突き立ったのであった……。

間一髪セーフ！

つづく……。

ブルームーンの場合、ピンクの騎士

「きゃあ！」

まるで、波の上をすべるモーターボートみたいにボヨンボヨン悪路を飛び跳ねながら、ミキ・ミキの運転するシュビムワーゲンが軽快な走りで敵兵の合間をかくくぐる。

それにしても、エンジンのうるさい車だなあ。

見ると、後部座席のすぐ後ろに、空冷式の水平対向4気筒エンジンが、ほぼむき出しの状態で据え付けられていた。それが機嫌の悪いドラゴンみたいにガオガオ唸りをあげるもんだから、もう、やかましいのなんのって……。

そしてフルオープン座席には、埃っぽい風が容赦なく吹き込み、あたしのプニプニ軟らかいほっぺは、風圧のため百面相したみたいに変えてしまう。自慢の輝くような金髪だって、パワーって爆発したみたいに風になぶられて、もう最悪。

うっ、目をあけてられないよお……、リップグロスに、砂がベタベタくっつくし……ぺっぺっ！

「ねえ、もっとましな車なかったの？ 乗り心地だって超悪いし、何だかバスタブに車輪くっつけたみたいで格好悪いよ、この車」

「ドライブしてるわけじゃねえんだ、ぜいたく言っつなよ。それにこいつは水陸両用なんだぜ」

うーん、言ってみれば確かにこの車、ケツんところにスクリューみたいなのがくっついてるよなあ……。でもこんな鉄の塊がちゃんと水に浮くのか？ かちかち山の泥舟みたいに、あっけなく沈むんじゃないかな……。そんな用途不明な装備より、防弾ガラスのハイドroppでも付けてほしかったよ、あたしとしては……。

ルビーのピアスをつけた可憐な耳元を、流れ弾がヒュンヒュンか

すめ、あたしは思わず首をすくめながらため息をついた。

「なあ、ブルームーン」

「なに？」

エンジン音がうるさくて、自然と声が大きくなる。

「前から言おう、言おうと思ってたんだが……」

「え……」

おいおい、もしかしてこんなとこで愛の告白かあ？ いるんだよね、相手がパニックつてるとき、どさくさに紛れてサラッとコクつちやうヤツ。考えるヒマを与えないってゆうの……。

「あ、あたし見た目よりプラトニックだから……。遊びだったら許さないからね」

「いや、そういうんじゃない……」

ミキ・ミキは、何だか言いにくそうに首の後ろをボリボリ掻いた。

「その鎧って……、やっぱりコスプレっていうやつか？」

「……なっ」

あたしは、赤面した。

「ばかな事言うな！ こ、この鎧はな……」

この、ど派手で超おマヌケなショッキングピンクの鎧は、我が祖国ペーシュダード王国の近衛騎士団に伝統的に受け継がれる女騎士のコスチュームだ。オリハルコンという軽量で丈夫なレアメタルで造られているので、着心地は抜群で、防御力にも優れるが、いかにせんデザインがちよっとアレなので……。

正直、着るの嫌なんだよね。

「ミキ・ミキ、おまえ今、なんかイヤらしい事考えてるだろ？」

あたしは、無意識に足をぎゅっと閉じた。この鎧は、なぜだか太ももの部分が思いつきり露出しているのだ。ものすごく防御力に難がありそうだが、デザインのにはかなりセクシーだ。

「言っとくが、あたしはまだバージンだ。もし襲われたら全力で抵抗するからな」

ミキ・ミキは、はははと白い歯を見せて笑った。あーっ、バカにしたなあーっ。

そのとき、前方に敵魔法兵の一個小隊が呪文を詠唱しながら立ち
はだかつてるのが見えた。彼らの周囲を陽炎と赤いオーラが、まるで夜光虫みたいに包み込んでるところを見ると、どうやら火炎魔法で攻撃してくるつもりらしい。

「しっかり掴まってろよ、しゃべると舌嚙むぜ」

ミキ・ミキが、ぐんとアクセルを踏み込んだ。

「あ、安全運転よろしく……」

小振りなシュビムワーゲンの車体が、矢のように加速した。

とたんに、前方でフラッシュをたいたような閃光が走り、マグマのように渦巻く紅蓮の炎がもの凄い勢いでこちらに迫ってきた。

「来たぞっ」

ミキ・ミキが急ハンドルを切る。

シュビムワーゲンのベージュ色の車体が、弧を描いて急旋回した。

「きゃーっ!」

あたしは、あやうく遠心力で車外に放り出されそうになり、フロントウィンドウのフレームに必死でしがみついた。

「ちょ、ちよっと! 乱暴な運転しないでよ。この車、シートベルトないんだからあ! ってゆーかドアすらも付いてないじゃん!」

あたしの声が聞こえているのか、いないのか、ミキ・ミキはスタントマンよろしく、何度もギュワワンと派手にハンドルを切りながら敵の攻撃をかわした。あたしは、今度こそちよっぴりチビってしまったかもしれない……。

「おい、ブルームーン!」

「えっ、な、なに?」

「そいつで反撃しろ」

ミキ・ミキがあごでしゃくって示す先には、あたしがさっきから

見て見ぬふりをしていた物騒なアイテムが不気味に黒光りを放っていた。このシュビムワーゲンの助手席には、なんと7・92ミリ機関銃が備え付けられているのだ。

「ば、ばか、仮にも誇りある近衛騎士が、こんな無粋な飛び道具なんか使えるもんか」

再びミキ・ミキが急ハンドルを切った。車体のすぐ横を炎の塊がごうごうとかすめ、ボディがちりちりつと焼けた。

「じゃあ、二人仲良くバーベキューになるか？」

そう言つとミキ・ミキは、車の方向を転じ、敵魔法兵の一団に向かって猛然と突進していった。

ええい、ままよ、もうどうにでもなれってんだ！

あたしは中腰で立ち上がると、おっかなびっくり機関銃のグリップを握りしめた。

シュタタタタン！ シュタタツ、シュタタタタン！

あたしの白魚のような指先がトリガーを引いたとたん、両肩に鈍い反動を伝えて機関銃が火を吹いた。たちまち、幾筋もの光芒が敵のいる辺りに吸い込まれていつて、あたし達に魔法を放っていた敵の小隊は、散り散りになつて逃げ始めた。

な、なんか近代兵器の威力を知ると、苦労して魔法を習得するのがバカらしくなってくるなあ……。

「おいブルームーン、ちょっとあれを見ろ」

ミキ・ミキの指差す先に、赤茶けたレンガ造りの大きな倉庫が見えてきた。夜の闇の中、その倉庫はミュージカルの舞台みたいに華麗に数多くのスポットライトで照らし出されていた。

その倉庫を、自動小銃を担いだ大勢の敵兵が厳重に守っている。よっぽど重要なアイテムを保管してあるんだろーね。

「あの中に、この戦闘の勝敗をにぎる鍵が収められてるような気が

するんだ。ちよつとあいつをぶつ壊してみようぜ」

ミキ・ミキが口の右端をにいつとつり上げて笑った。ほんつと、こいつつて乱暴なやつだな、いやむしろ悪党と言つべきか……。

「ぶつ壊すつたつて、けつこつ頑丈そうだよ、あの倉庫。そう簡単には壊れないと思うけど……」

「ちよつと後ろの座席を覗いてみてくれ」

あたしは嫌ーな予感を抱きながらも、恐る恐る後部座席をふり返つた。はたして、そこには見た事もないような武器がでーんと鎮座していた。それは、武骨なブリキ細工の天体望遠鏡みたいな形をしていた。

「……………な、なにこれ？」

「70ミリ・アサルト・ロケットランチャーだ」

あたしは思わずかくんと腰が抜けるのを感じた。機関銃の次はロケットランチャーかよ、人を何だと思つてるんだ！

「無理……………あたし、こんな物扱えない」

「大丈夫、そいつは発射チューブがファイバープラスチックで造られていて、総重量は3キロしかないんだ。女の子でもじゅうぶん扱えるさ」

「いや、そういう問題じゃなくつて……………」

「おい、敵がこつちの存在に感づいたぞ。はやくそいつをぶつ放せ」
くつそう……………、有無を言わせなかつもりだな。よーし、もうどーなつても知らないぞお。

あたしはへつぴり腰で立ち上がると、そのロケットランチャーをおつかかなびつくり構えた。

「こ、こんな感じでいいのかな……………？」

「おう、ずいぶんと様になつてゐるじゃないか」

ミキ・ミキは、ずり落ちた眼鏡を人さし指でくいつと持ち上げながら、につと笑った。

「でも気を付けろよ、注意しないと、発射したときの反動で肩の関節を外すからな」
「アホかつ！」

つづく……。

ブルームーンの場合、レッドスネーク、カモーン！

ずしんと大地が鳴動した。

と同時に、夜の駐屯地にその威容を誇るレンガ造りの倉庫が、一瞬だけ昼間のように照り輝いた。

あたしが、シュビムワーゲンの助手席から放った70ミリ・アサルト・ロケットランチャーが命中したのだ。

高位魔法使いによる爆炎魔法にも匹敵するその破壊力は、頑強な倉庫の壁に軽々と大穴を空け、守備していた敵兵を紙くずみたいに吹き飛ばした。

ちなみに、あたしも座席の上でずっとこけて、シートの硬い背もたれにしたたか頭をぶつつけてしまった。

「いったーい……、頭がバカになったら、どうするんだあ」

あたしが涙目になって打った後頭部をさすっていると、ミキ・ミキがジッポーでタバコに火を付けながらぼそっとつぶやいた。

「パンツ見えてるぞ」

「きゃあ！」

あたしは、はしたなく拡げていた足を閉じ、ぴよこんと素早く起き上がると座席の上にお行儀良く座り直した。

「ミキ・ミキのバカ！ エッチ！ 変態！」

パンツのシミを見られたかな、絶対見られたよなあ……、ふえーん、赤っ恥だあ！

あたしは、今度から多少カッコ悪くともブルマをはいてこようと固く心に誓った。

「よし、あの中に何が隠してあるのか見に行こうぜ」

ミキ・ミキは、あたしの傷ついた乙女心など意に介さぬように、

くわえタバコのままギアをローに入れ、シュビムワーゲンを勢いよく発進させた。

近くで見ると、その倉庫は一風変わった造りをしていた。

ガラスのない窓には全て嚴重に鉄格子が嵌められ、その窓に比して、やたらに吸排気用のダクトの数が多いのだ。そして正面にある鋼鉄製の頑丈な扉は、壁一面を覆い尽くすほどに巨大だった。

いったい何が入ってるんだろう？

あたしたちは、倉庫の壁に穿った大穴の前に車を止め、その奥の暗がりを感じと見つめた。

「な、なんか不気味だね……」

はつきりとは分からないけど、中から異様な気配がただよってくるのを感じる。

と、そのとき……

「なに、あの音？」

まだモウモウと煙の立ちこめる穴の奥から、気味の悪い音が聞こえてきた。

それは、何て例えればいいんだろう……、蒸気機関から水蒸気が漏れ出すような……、いや違うな、あれはそう、ほらっ、ガラガラヘビの鳴き声だ！

しゅるるるるる……

突如、倉庫にぼっかり空いた穴から巨大な爬虫類の頭部がぬつと現れた。

それは、皮膚全体が赤褐色のウロコで覆われ、さらに表面をヌメヌメとした粘膜が覆い、今にも生臭いにおいがぷーんと漂ってきそうな気色悪い質感を保っていた。二枚貝のようにぱっくり開いた口にはノコギリみたいな歯が生えそろう、その隙間から絶えまなく黄色い唾液がつっつと糸を引いて垂れている。

そして感情のかけらもない濁った蛇眼がぼうつと赤く光り、あたしたちと目が合うと、とたんにギラツと凶悪な輝きを放ったのだ。

「きゃあ！　なによ、なによ、なんなのよ、あいつわ！」

「……そうか、妙な建物だと思っていたが、これは召喚獣の飼育施設だったのか」

「落ち着いてないで、さっさと車を出しなさいよ！」

あたしが背中をバンと叩くと、ミキ・ミキはゴホゴホと咳き込みながらシュビムワーゲンを急発進させた。タイヤが軋み、砂煙を巻き上げるなか、シートごしにそつと後ろを振り向く。

崩れかけた倉庫の壁を粉碎して全容を現したそいつの正体は、2つの頭部を持つ多頭竜^{マルチヘッド}だったのだ。

「げ……、あれってきつと、この前リッツヘルムの町を滅ぼしたのと同じやつだよ」

「ちくしょう、何か良いもんでもあるかと思ってつついてみたら、こりゃとんだ藪蛇^{やぶへび}だったぜ……」

「ほんつと、あんたの言うとおりに行動したら、ろくな事にならないんだから。どーすんのよ、これから？」

ミキ・ミキは、ちよつとのあいだ難しい顔で思案していたが、不意に口の右端をにいつとつり上げて笑った。こいつが、こーゆー顔をするときは、要注意だ。間違いなく、何か口クでもないことを思いついたときだから。

「へへへ、いいこと思いついたぜ」

ほら、やっぱり……。

突然、ミキ・ミキは、思いきりハンドルを切りながら、サイドブレーキを引いた。

「きゃあ！」

シュビムワーゲンのタイヤが悲鳴を上げ、車体がスピンターンし

て180度方向を転じる。

「な、な、なんて乱暴な運転するのよ！」

こいつまさか、わざとやってるんじゃないだろうな？ あたしは、3度目のシミをつけてしまったパンツを、もう洗濯せず捨てることに決めた。

「おいブルームーン、あの化け物に向けて機関銃をぶっ放せ」

そう言いながら、ミキ・ミキは、アクセルを踏み込みシユビムワ―ゲンを多頭竜ヒュドラに向けて急接近させた。

「ば、ばか、こんなちゃちな銃火器があいつに通用するもんか！」

「いいんだ、やつを怒らせるのが目的なんだから」

「え、それってどういう事……？」

そう言っているあいだにも、車は砂煙を巻き上げて疾駆し、あのおぞましい多頭竜ヒュドラの姿があたしの眼前にどんどん近づいてくる。あたしは、もう、なかば投げやりな気持ちになって機関銃のグリップを握りしめた。

ええい、もうどうにでもなっちゃえー！

タンタンタンタンタン……

機関銃の銃身と多頭竜ヒュドラの頭部とを、幾筋もの光の線が繋いだ。

弾丸が次々、夜の闇に浮かび上がる多頭竜ヒュドラのシルエットに吸い込まれてゆく。

でも、あの硬いウロコに覆われた体じゃあ、傷も付かないだろうなと思っていたら、案の定、多頭竜ヒュドラはひるむどころか怒りを爆発させ、天にも届くほどの咆哮をほとばしらせた。

そのエンジン音をかき消す野太い叫び声が、夜の戦場をビリビリと震撼させる。

多頭竜ヒュドラは、合計4つあるガラス玉のような目であたしを睨みつけ

ると、たちまちその巨体を躍らせた。

「や、やだっ、こっちに向かってきたわよーっ！」

「それで、いいんだ」

ミキ・ミキは、再びハンドルを切ると、猛り狂った多頭竜^{ヒュドラ}から猛スピードで逃れはじめた。

多頭竜^{ヒュドラ}は、トカゲの類がみな走るときそうするように、その巨体をくねくね左右に揺すりながら猛然と追いかけてくる。

どっ、どっ、どっ、どっ、という地響きが、車に乗っていても体に伝わってくるのだ。

「それでっ？ それでっ？ これからどうすんの？」

あたしは、半ベそをかきながらミキ・ミキの腕にしがみついた。

「敵が今回の戦闘にあの多頭竜^{ヒュドラ}を投入してこなかったところを見ると、どうやらあいつを制御できるだけの力を持った召喚士がいないと見た」

「……だから？」

「よーするに、今のあの化けもんには、敵も味方もまったく区別がつかないってことさ。だから、あいつを敵の密集している辺りに誘導してやれば、敵兵は次々とあいつの餌食になり、たちまちその戦力を減らすって寸法さ。どうだ、名案だろ？」

「そ、そうかな……」

あたしは、パニックのため明晰な思考能力を完全に失っていた。

自信たつぷりにずり落ちた眼鏡をくいと持ち上げるミキ・ミキを見ていると、ひょっとして上手くいくんじゃないかって気になってしまう。

「あ、見て見て！ あそこに敵が陣地に使ってるプレハブの兵舎があるよ」

「よしっ、まず手始めに、あの場所に突っ込んでみるか」

「えっ、突っ込こむって……？」

ミキ・ミキは、カクンとシフトダウンしてから、アクセルをべたつと踏み込んだ。とたんにシュビムワーゲンが加速し、あたしの華奢な体がグンと背もたれに押し付けられる。

「いいか、ブルームーン。姿勢を低くして、両膝のあいだに頭を入れるんだ」

「うん、分かった……………って、ちょっと待ったあ！ これって旅客機が不時着するときの緊急姿勢じゃないかあ！」

兵舎の窓の中、慌てふためいて右往左往する敵兵の姿がグングン近づいてくる。

「ちよ、ちよ、ストップ、ストップ！ ひ…………人殺しーっ！」

あたしの恐怖に引きつった悲鳴が、多頭竜^{ヒュドラ}の甲高い咆哮とびつたり重なった…………。

つづく…………。

ブルームーンの場合、夢は今も、夢のままで……

青い空までピンク色に塗りかえてしまいそうな、そんなみごとな桜吹雪が、何度も、何度もあたしたちの視界をさえぎっている。

太陽の匂いをいっぱいにつめ込んだ麗らかな春の風が、ふわっとあたしの髪を舞い上げるたび、通学路に張り出した桜並木のアーケードから鮮やかなピンク色の花びらが、どっと舞い散るのだ。

3年間、通い続けたこの並木道とも、ついに今日でお別れかあ……。

あたしたちは、はき古したカレッジシューズで一步一步踏みしめるように、歩き慣れた石畳を学舎へと向かっていた……………。

「ああ、思い出すなあ……………」

「何が？」

「ほら、入学式るとき、ブルームーンだったらさあ、校門の前でさっそく3年の男子とケンカになっちゃって……………」

「そうそう！ 入学初日から停学になったのってあんただけなんだよ。王立魔法学校創設以来はじめてのことだって、担任のマイヤーせんせ、ずいぶんと嘆いてたもん」

「うーん…………、二人とも、やなこと憶えてるなあ」

「わたしは、あのとき初めてあんたと出会って、こりゃとんでもないヤツとクラスメートになったもんだと、ちよっぴり憂鬱だったのよ」

「えーっ！ ひどーい、あんたつてば、そんなこと思ってたのお？」

「ははは、だって、今までこんな破天荒なおてんば娘、見たことなかったもん」

「…………でも、そのブルームーンが、まさか王国騎士団の訓練過程に進学するとはねえ」

「な、なによ……」

「だって、あそこに入るのって下手な大学に進学するより断然、難しいって聞いているよ」

「そうそう、あんたは自然魔法の学科試験、のきなみ落第点とってたじゃない……。ま、体育の授業だけは、抜群の成績だったけどね」
「それに騎士つてさあ、人一倍正義感の強い者じゃないとなれないんじゃない？」

「なんだよー、あたしが悪人だってゆーのかあ？」

仲良しのミーシャとガブリエルが、立ち止まって空を見上げた。
あたしもつられて、海の底みたいに真つ青な空をふり仰ぐ……。

光の粒子が、プリズムで分解したみたいに七色に煌めいて、あたしの長い睫毛に降りそそいだ。

「……………ううん」

ミーシャが、空を見つめたまま首を振った。

「ブルームーンはいつだって正義の味方だよ……」

ガブリエルも、まぶしそうに目を細める。

「そうだよ、わたしたちが困っているとき、いつも助けてくれた。不良たちにイジメられたときだって、ブルームーン、すぐに助けに来てくれたもん……」

「ふふふ、全員、病院送りにしちゃったけどねーっ」

「ちよっとお、それじゃまるであたしが不良も一目置く、スケ番みたいじゃないかあ」

ふいに、二人があたしの顔を見た。その目がちよっぴり哀しそうだった。あたしも何だか切なくなる……。

「……………でも、これからは、わたしたちの知らない所で、国を護るために戦うんだね」

「う、うん、まあね……、無事に騎士の称号を貰えたらの話だけだね」

「もう、あまり会えなくなるね……。ねえ、ブルームーン」
「な、なによ、急に真顔になったりして……」

ミーシャの目から涙があふれた。

「……………絶対に……………絶対に、死んだりしちゃダメだからね」
ガブリエルも、目にいっぱい涙をためながら微笑んだ。

「わたしたち、いつもあんたの無事を神様に祈ってるから……」

「う、うん……………二人とも、ありがと……………なんだよお、まだ泣くのは早いじゃないかあ。卒業証書を貰うのはこれからだぞお」

「そ、そうだね」

「ってゆーか、ブルームーン、あんたが一番泣いてるじゃん」
あたしは、制服の袖で涙を拭った。

「う、うるさい、桜の花びらが目に入ったんだい！」

春風に舞う桜吹雪のカーテンは、甘い匂いを振りまきながら、あたしたちを優しく包みこむ……。

あたしは、何だか胸がいつぱいになって、いつもより余計にはしやいで見せた。

「よーし、じゃあ、3人で指切りしよう！」

「なんて……………」

「絶対、また3人で会おうねって」

「おっけー！」

みんな、みんな、元気でね……………、あたしは、みんなが幸せに暮らせるように、国を護るためにガンバルから……………。けっして死んだりしないから……………、みんなの元気な顔を再び見るまでは……………、だから……………だから……………。

……………あれっ？

あたしは、目の前をひらひら舞う桜の花びらが一瞬にして、もう手の届かない遠い彼方へ吹き飛ばされてしまったような気がして思わず息を呑んだ。

「……………桜吹雪は？」

視界の片隅に、ホタルみたいにタバコの火がぼんやり灯っているのが見える。

「弾丸の雨なら、さっきまで大量に降ってたぜ」

あたしは、意識に霧が掛かったまま、虚ろな目で真っ黒い空を見つめていた。

「……………ミーシャと、ガブリエルは？」

「はっ？ さあな。……………凄腕の傭兵、ミッキー・三木様ならここにいるけどよ」

「……………あ」

あたしは、急激に甦った意識の奔流に心を満たされ、ターコイズブルーの美しい瞳を大きく見開いた。

「あ！」

がばつと身を起こす。

「こら、ミキ・ミキー！ さっきは、よくもよくも恐い目に会わせてくれたなあ！」

「やっと目を覚ましたと思ったら、なんだよ、やぶからぼうに」

「しらばつくれるな！ あたしは、もう自分が死んだと思って、夢の中で、昔の友達に会いに行ってたんだぞ」

ミキ・ミキは、軽快にシュビムワーゲンのハンドルを捌きながら、はははと乾いた声で笑った。

それにしてもあたしは、どれくらいのアイドア気を失っていたんだろう……………。黒々とそびえる木々の狭間から遠くデマヴァンド山の稜線を透かし見れば、もうすでに夜が白々と明け始めているのが分かる。

それにしても、このシュビムワーゲンのボディは、もうガタガタだ。あたしの真ん前に据え付けられていた機関銃も、台座の部分から根こそぎ折れてしまって、どこにいったのやら見当たらない。

ミキ・ミキのクレイジーめ！　今まで、そうとう無茶な運転を繰り返していたに違いないぞー！

「……………おい、ミキ・ミキ」

「何だ？」

「おまえ、まさかとは思うが…………、あたしが気絶しているあいだに、何かエッチなことしなかつたろーな？」

「してないよ」

「ほんとか？」

「ああ…………」

ミキ・ミキは、口の右端をにいつとつり上げて笑った。

「それともなんだ、シミのついたパンツを脱がせてやった方が良かったか？」

「あーっ、てめーっ！」

あたしは、ミキ・ミキの胸ぐらに掴み掛かった。

「あたしは、こう見えてもこの部隊の司令官だぞ。おまえに、そこまでコケにされる憶えはないからなあ！」

「わっ、バカ、止める、危ない！」

コントロールを失ったシュビムワーゲンが激しく蛇行する。ミキ・ミキは、大あわてで鉄橋の方を指さした。

「ブルームーン！　ほらっ、あれを見る。すごいだろっ、敵がどんどん撤退してゆくぞ」

示された方角を見ると、ムイムル川の鉄橋を敵兵がぞろぞろと敗走してゆくのが見えた。おびただしい数の負傷兵をとまなつての撤退で、その様子はもはや、ほつほつ這々の体といった表現が当てはまるほどの惨敗の構図だった。

「……………ほんとだ」

「な、俺の作戦が図に当たっただろ？ やつら、あの多頭竜に蹴散らされて手も足も出なかったんだぜ」

ミキ・ミキは、得意満面ですり落ちた眼鏡をくいつともち上げた。

「……………多頭竜？」

あたしは、頭の中からすっかり抜け落ちていた、ある重要なフアクターに思い当たった。それは、何だか凶暴で、おぞましくて、思い出しただけで、またまたパンツにシミをつくってしまいそうなダークな記憶だった…………。

「そ、そうだった！」

欠如していた部分の記憶が、瞬時に甦った。

「そういえば、あの多頭竜はどうなったんだ？」

あたしは、おそろおそろ後ろを振り向いた…………。

はたして、そこには…………地を這って必死の形相で追いかけてくる、巨大爬虫類の姿があったのだ。

「ひえーっ！ あいつつてば、まだ追いかけて来てるのー？」

つづく…………。

ブルームーンの場合、ウイスキーが大好きでしょ？

多頭竜^{ヒュドラ}の正体は、何のことはない体長1センチほどの水棲生物だ。ヒドラ亜目、ヒドラ科、ヒドロ虫類……。

カンブリア紀に初めて姿を現したこの無脊椎動物は、円筒形の体から何本もの触手をのばしてミジンコなどを捕食する、取るに足らない下等生物だった。

ところが古代ギリシア期に、レルネの沼地に生息する一部の個体が、気紛れな神々から授かった魔力により突然変異し、やがてドラゴンにも匹敵するほどの強大な力を得たのだ。

円筒形の体は、いつしか分厚いウロコで覆われたワニかトカゲのような姿に变じ、複数の触手は巨大な蛇の頭部となつて大型の哺乳類をも補食した。

多頭竜^{ヒュドラ}は、その頭部の数に比例して攻撃力を増す。

例えば、8つの頭を持つヤマタノオロチなどは、多頭竜^{ヒュドラ}のなかでもかなり高位な部類で、神々にも匹敵する戦闘能力を持つ。多頭竜^{ヒュドラ}の最高位は、勇者ヘラクレスと戦った9頭龍で、ヒンズー教の最高神ビシュヌの乗り物であるアナンタ龍などもこれに類する。

今、ブルームーンたちを執拗に追いまわすこの多頭竜^{ヒュドラ}は、2つの頭部しか持たないもつともレベルの低いやつだが、それでもその攻撃力は町一つ滅ぼしてしまうほど強大で、ブルームーンは今、ライオンに追われるガゼルの気分を味わっていた。

「ちょっと、どーすんのよお？ このまま永遠に逃げ続ける気？」
ミキ・ミキは、忌々しげにサイドミラーを覗き見ながら、ちつと舌打ちした。

「ほんと、しつこい野郎だぜ。よっぽど俺たちのことが喰いたいらしいな」

「食われてたまるか！」

「そう狼狽^{うろた}えるな、もうすぐ夜が明ける。あいつは夜行性で太陽の光に弱いから、朝まで逃げ切れればこっちの勝ちだ」

あたしは、もう一度だけ恐る恐る、後ろをふり返ってみた。

巨大な爪で地面を掻き、蛇のようにくねりながら迫り来る多頭竜^{ヒュドラ}の姿は、何度見ても絶大な迫力をもってあたしのキュートな心臓を縮み上がらせる。

ぱっくり開いた赤い口からは絶えず涎が糸を引いて後方にたなびいていた。

そして、その口にずらりとならんだ鋭い歯に引つ掛かるようにして、食いかすなのであるう、迷彩ズボンをはいた兵士の足がだらーんとぶら下がっているのが見えた……。

「ひえーっ！」

もういやだ。

この作戦が終了したら、さっさと除隊して故郷に帰ろう。そしてミーシャやガブリエルたちと毎日楽しく過ごすんだ。そうだ、最後にジヨバンニのじじいを一発ぶん殴ってから辞めよう。それがいい、積年の恨みを思いつきり晴らしてやる。そして軍人を辞めたら、素敵な彼氏をつくって夜景の見えるお洒落なマンションで暮らすんだ。夜ともなればシャンパングラス片手に、2人掛けのソファに並んで座ってラブラブいちゃいちゃ……………。

「やばい、そろそろ燃料切れだ」

「えーっ！ ど、ど、どーすんのよお？」

「おまえってやつは、どーすんのよーしか言わねえのな。心配すんな、車じゃない、俺様の燃料が切れたと言っただんだ」

そう言ってミキ・ミキは、懷からウイスキーのポケットボトルを取り出してラッパ飲みしようとした。

「あーっ、このバカ！ 運転中に酒なんか飲むなー！」

あたしは、その酒ビンを引ったくると思いつき遠くへ放り投げた。

「あ……、ああ……、ブルームーン、おまえ何てことしてくれたんだ……。あれがないと、俺は……。俺は………」

「なんだよ大げさなやつだなー、作戦が終わって基地に戻ったら酒ぐらい浴びるほど飲ませてやるから」

しかし、次第にミキ・ミキの様子が変わってゆくのが分かった。

あの尊大で、不遜で、傲慢無礼な男が、まるで飼いならした猫みたいに大人しくなつてゆくのだ。

なんだか体もひとまわり小さくなつたみたいだぞ。

そして、それと同時に今まで軽快な走りを見せていたシュビムワ―ゲンが、徐々にその速度を落とすはじめた……。

「お、おいミキ・ミキ……、もっとスピードを上げないと追いつかれるぞ」

すると彼は、か細い声でこう言った。

「あのう……、中隊長殿、そろそろ運転を代わっていただけないでしょうか……、自分、もう疲れてしまつて」

「ちゅ、ちゅうたいちようどのー？ どうしたミキ・ミキ？ 冗談ならやめてくれよ、今は、あたしたちの命がかかっているんだ」

しかし彼は、情けない顔で首を左右に振ってイヤイヤをした。

「ダメです……、自分、車に乗ってこんなにスピード出したこと、生まれて初めてです」

「うそつけ！」

「本当です。運転免許証だって、ずーっとゴールド免許なんですよ」

「ば、ばかやろっ！ 今はとにかく安全運転なんかしてたら捕まつて食われる。もっとスピードを出せ、アクセルを踏み込むんだあ」

そう喚きながら、ちらつと後ろを振り向くと、あのおぞましい多^ヒ頭竜^{ユドラ}の顔が、もうすぐそこまで迫って来ていた。

「あわわわわ！」

あたしは、カモシカのような足を思いっきり伸ばすと、ミキ・ミキの靴の上からベタンとアクセルを踏み込んだ。グオーンツと唸りをあげてシュビムワーゲンが急加速する。

「ちゅ、中隊長殿、止めてください」

「うるさいっ！」

ミキ・ミキが必死になってあたしの足をどけようとするが、あたしは踏ん張ってアクセルを踏み続けた。

「ひえっ」

狼狽えたミキ・ミキが、あらぬ方向にハンドルを切った。そのとたん、シュビムワーゲンは、傍らの岩場にドンツと乗り上げ、そのまま横倒しになってしまった。

「きゃあ！」

そして90度傾いた車体は、砂埃を巻き上げながら数十メートルほど引きずられたところで、やっとその動きを止めたのだった。

「くうーっ、痛ててて……、ちくしょう、ヒドイ目にあった」

傷だらけの鎧を引きずって、やっとのことで車から這い出したあたしの華奢な姿に覆いかぶさるようにして、黒く巨大なシルエットがぬうつと重なった……。

「でっ、でっ、出たーっ！」

つづく……。

ブルームーンの場合、あたしだって、ヤルときゃヤル！

蛇の顔を、真正面から見たことがあるだろうか？

古くから悪魔の象徴として忌み嫌われ、恐れ崇められてきたこの爬虫類の顔は、見事なまでに無表情だ。

その間の抜けたツラは、むしろ滑稽とさえ言える。

でも表情がないぶんだけ、無機的というか機械じみてるといふか、とにかく何を考えているのか分からない不気味さがこいつの顔にはある。

あのガラス玉のような感情のかけらもない目にロック・オンされると、へなへなと体中の力が抜けてしまうんだ。

いわゆる蛇に睨まれた蛙ってゆーやつ？

あたしは、星空と重なるようにして頭上に黒々とそびえる2つの影を、ただ茫然と見上げていた。全身をイヤな感じの汗が伝い、手足は金縛りにあったように動かない。

多頭竜ヒュドラのぱっくり裂けた口からは、不完全燃焼をおこしたガスバーナーの炎みたいに赤い舌がちろちろ出入りしている。あの舌は、獲物のおいを嗅ぎ分けるために存在するんだ。

あ、あたしのフルーティな体臭を堪能しよーってかあ。
ぞわわわー

あたしの繊細できめ細かなやわ肌は、今や毛をむしられた鳥みたいに粟立っていた。

ちょ、ちょっとタンマ、あたしなんか食べても……美味しいかもしれないよ、いや、きつと美味しいに決まってる、だってムダなお肉が付かないようにダイエットしてるし、お肌だって毎日ちゃんと手入れしているもん。そりゃ美味しいには決まってるんだけどさ、でもでも、ちょっと待って、お願い、早まっちゃダメ……。

蛇眼の呪縛により身動きの取れないあたしは、必死になって心の声で呼びかけた。テレパシーよ届け！

しかし無表情な目であたしを見つめる多頭竜ヒュドラの頭部が、鎌首をもたげたままぐんと反り返った。

ニュートン力学でいうところの位置エネルギーの蓄積ってゆーやつ？ よーするに、反動をつけてあたしの事を一気にパクツと飲み込もうとしてるんだ。ああ、万事休す！

もうだめだあ……。

死ぬ時はもつと美しく散りたかった、せめて汚れたパンツだけでもはき換えておけばよかった、ひーん、あたしってば、最後は蛇に食われて死んじゃうんだあ、願わくば極楽浄土へ旅立たんことを、なんまんだぶ、なんまんだぶ、なんまんだぶ……

などとクリスチャンであるはずのあたしが錯乱して念仏なんか唱え始めたとき、突然の爆発音とともに多頭竜ヒュドラの側頭部からぱあっと炎の花が咲いた。

なにか火器が着弾したらしい。

さすがに鋼鉄なみのウロコを持つこいつでも、弾丸がドタマにヒットしてはたまらない。それなりのダメージは被ったらしく巨体がぐらりとよろめいた。

「中隊長どのーっ、ご無事ですかーっ？」

見ると、グレネード・ランチャーを携えたライマー軍曹があたしに向かって大声で呼びかけていた。その周りには、彼に付き従う大勢の兵たちが銃を片手に喚声を上げている。

ライマー、あんたって最高の部下だ！ けつきよく、最後の最後に頼りになるのはライマー、お前だけだよ……。

「あ、ありがとう、よく来てくれたね……」

「中隊長殿、危険ですから早くそいつから離れて下さい！」

そう言うライマー軍曹は、兵たちに片手で合図を送った。たちまち彼らの手にした銃火器が一齐に火を吹く。

「ケチケチするな！っ、全弾撃ち尽くせーっ！」

夜明け間近の薄闇に耳をつんざく発砲音が反響し、無数の銃弾が次々と黒い巨体に吸い込まれていった……。

さすがにこれだけの一齐照射を浴びれば、いかな頑丈な多頭竜^{ヒュドラ}とてたまったものではないだろう。

あたしは、土俵際^{どひょうぎわ}でうつちやられた力士みたいに豪快に崩れ落ちる多頭竜^{ヒュドラ}の姿を想像した。

しかしこの化け物は、存外平気な様子で、天に向かって低く咆哮したかと思うと、今度は補食するターゲットをあたしからライマーたちに変更したらしく、その重機のような巨体をのっそりと彼らの方に向けたのだ。

あつ、今度はライマーたちが危ない……。

そう思った瞬間、あたしの雌豹のようにしなやかな肢体が弾かれたように動いた。

多頭竜^{ヒュドラ}があたしに背を向けたことにより、その蛇眼による呪縛から解き放たれたのだ。

よし、反撃するぞお！

心強いライマーたちの出現により、あたしの熱いハートは、今や猛烈にファイティング・スピリットを取り戻していたのだ。

女の子って気分が変わりやすい。

憎い多頭竜^{ヒュドラ}めえー、叩きのめして、切り刻んで、蒲焼き^{かばや}にしてやる！

あたしは騎士剣を振り上げると、多頭竜^{ヒュドラ}の太い尾を足がかりに、そのゴツゴツした背中を猛然と駆け上がった。と同時に、古代ヘブライ語の呪文^{スヘル}を長々と詠唱する。たちまち騎士剣の刀身に刻まれた

神代文字が輝きだし、神聖な魔力のオーラが青白い炎となって刀先を中心にくるぐる渦を巻き始めた……。

高位聖霊魔法の魔力注入だ！
インフュージョン

無数の光の粒子がもの凄い勢いで刀身に吸い込まれてゆく……。そして溢れんばかりの魔力がマグマのように刃先から噴き上がると、周囲の空間にパチパチッと眩いスパークがはじける。

凝縮されたパワーがソニックブームを呼び起こし、あたしは全身に帯電した焼けつくような静電気を放出して、ぶわっと金髪を逆立てた。

時空が歪んでキーンと耳鳴りがする……。

いつくぞお……。

小山のような多頭竜の背を一気に走破したあたしは、やがて首から上の急勾配を軽やかに駆け上がると、蛇の頭部を蹴ってポーンと跳んだ。

そして意味もなく一回転したあたしは、そのままの勢いで多頭竜の眉間に、稲妻のごとく騎士剣の一撃を叩き込んだのだ！

「やあーっ！」

みしっ……

鈍いイヤな音がした。

多頭竜の頭蓋骨が陥没した音だ。
ジュウドラ

ついでに、あのガラス玉みたいな眼球がポポーンと豆鉄砲みたいに飛び出し、雑草の上をコロコロと転がった……。

やがて、ぐおおおという断末魔の低い唸り声が、陰に籠もつてもの凄く、天地を地鳴りのように震わせたのだった……。

.....<u>u>

ブルームーンの場合、勝利の夜明け

「きまったあ！」

あたしは、電柱ほどの高さもある多頭竜ヒュトラの頭頂から華麗に飛び降りると、着地と同時に両手を高々と振り上げ、まるで体操選手みたいにびしっとフィニッシュのポーズを決めた。

あの獰猛な多頭竜を一撃のもとに倒したんだ、あたしって本当にスゴイ！ まさに騎士の力ガミだね！

さあみんな、あたしを賞賛するのだ！。

まるでグリコの商標みたいに両手を伸ばして決めのポーズをとるあたしを、しかしライマー軍曹はじめ我が軍の兵士たちは啞然として見守った。

ん、どゆこと……？

ライマー軍曹が鯉みたいに口をパクパクさせている。

んー、聞こえないよお。

もう一度耳を澄ましてよく聞くと、さかんに「後ろっ、後ろっ」と言っているのが分かる。

うしろー？

あたしは、何か重大な事実を見落としているような気がしてハッとなった。

ドキツと心臓が高鳴る。

やばい、すっかり忘れてた！

あたしは顔を引きつらせながら、恐る恐る後ろをふり返った……。ひえーっ。

そ、そうなのだ、多頭竜ヒュトラには、頭が2つあったのだ！

あたしが叩きのめした方の頭は、皮をむいた魚肉ソーセージみたいにダラーンとだらしなく地に垂れていた。しかし残るもうひとつ

の頭は、眼光すさまじく沸騰したヤカンみたいに怒りを露わにしていたのだ。

真っ赤な口に、氷柱みたいな牙がぎらつと光る。

ああダメだ、本格的におしっこちびりそう……

ぐわおうっという死に物狂いの咆哮をほとばしらせて、多頭竜^{ヒュトラ}があたしに襲いかかる。

「きゃあ！」

あたしは、かろうじて地面を一回転してその攻撃をかわした。しかし怒り狂った多頭竜^{ヒュトラ}は、執拗に何度も襲い掛かり、あたしは立ち上がるヒマさえ与えられず、地面をゴロゴロとこるがり続けた。

ピンクの可愛い鎧はもう傷だらけ、おまけに命の次に大切な騎士剣もどっかに放ってしまっていた。

「中隊長殿、ひとまず逃げて下さい！」

ライマー軍曹が、腰だめにかまえたグレネード・ランチャーをばひゅん！ と一発放った。弾は、あやまたず多頭竜^{ヒュトラ}の頭部に命中し、やつは一瞬ひるんでその動きを止めた。あたしはそのスキに素早く立ち上がり、無我夢中で走った。

逃げるが勝ちだい！ ってゆーか逃げないと殺される。

ところが10メートルも走らないうちに、あたしの体がずしつと重くなった。

「中隊長殿ー、助けてくださいーい」

見ると気絶から覚めたミキ・ミキが、あたしの腰にすがりついていた。

「うわっ、バカっ、こらミキ・ミキ、この手を放せ！」

あたしは懸命にミキ・ミキを振り払おうとしたが、恐怖におののく彼の手はコルセットのように固く巻きついて離れない。それどこ

るか、こいつはあたしのキュートなヒップに顔を押し付けていた。
「きゃあ！ こ、このエッチ、変態野郎！」

ずん……..
と多頭竜ヒュドラが一步迫る。

「きゃあ！ ミキ・ミキのバカバカーっ、放せつてば、もう最悪う
！」

あたしは、筋トレする野球選手みたいにミキ・ミキのアホを腰に
引きずったまま、死に物狂いで逃げようとした。

「うー、重い……、女の子には絶対ムリ……」

ずん、ずん、ずずん……

と多頭竜ヒュドラがさらに猛然と迫る。あたしはもう、恐くて恐くて後ろ
を振り返ることができなかった。

「あたしって、まさに絶体絶命 って、これで何回目だろう、死
にそうになったの……？ ええと、1回でしょ、2回、3回……..
！」

などと指を折りながら死にかけて回数を勘定していると、あたし
の顔にぺちゅと生ぬるい液体が降りかかった。

な、何だ？ 気持ち悪い……。

顔に付いたネバネバを手で拭い、そおっーと上を見上げてみる……

……。と、そこには……多頭竜ヒュドラのつかい口があった。

ひえーっ、これって多頭竜ヒュドラのよだれだあ！

とうとうあたしは腰を抜かし、その場にぺしゃんと座り込んでし
まった。

さっきまで激情アドレナリンと発情フェロモン大放出したあた
しのファイティング・スピリットは、いまやゲシュタルト崩壊をお
こし、ついには自我喪失のため幼児退行を引き起こしてしまってい
た。

「ふえーん、かいじゅうコワイよお、かいじゅうコワイよお、かいじゅうコワイよお……」

あたしは両ヒジを左右にブンブン振りながら、がんぜない幼児のように泣きじゃくった。

そのとき……。

遠くデマヴァンド山の頂をかすめて、サーツと一直線に朝陽が差し込んだ。

ああ、それは何と神々しい旭日昇天……。

そのアポロンの光線は、まるで輝ける一振の聖剣のように夜の大気を切り裂きながら、真っ直ぐに多頭竜ヒュドラの五体をつらぬいた。やがてあの禍々しい巨躯が燐光を放ったようにぼうつと輝き出す。

とたんに多頭竜ヒュドラの蛇頭が苦しそうに呻き声を上げた。

「やった、夜が明けたぞ！」

「勝利の朝だ！」

兵士たちが口々に喚声を上げる。

多頭竜ヒュドラは陽光のまぶしさにきりきり舞いした後、やがて、のたうつようにムイムル川の河岸まで這ってゆき、ざぶんとその巨体を清流に沈めたのであった……。

「中隊長殿、中隊長殿、泣きやんでくだされ、我らの勝利でございますぞ！」

と、ライマー軍曹に揺り動かされ、3歳児から元の18歳児に戻ったあたしは、はっと我に返った。

「え……？ 勝ったの？」

「さよう」

「多頭竜ヒュドラは……？」

「シッポを巻いて逃げ失せました」
ほんと！？

あたしは、ヴィーナスのように表情を輝かせながら立ち上がった。知らず知らずのうちに、手にガッツポーズが生まれる。その姿は、まるで花柄のスクリーントーンを背景いっぱい貼り付けたみたい
に晴れ晴れしていた。

……………あたしたち、勝ったんだあ。

じわつと涙目になる。あたしは鎧の袖で涙を拭くと、いまだ腰に巻き付いているミキ・ミキの頭を一発ぶん殴った。

「こらっ、ミキ・ミキ！　いつまでひとのヒップにしがみついてんだあ！」

「も、申し訳ありません！　あまりにも形の良いお尻だったもので……………」

あたしは、もう一発ミキ・ミキをぶん殴ってから、ライマー軍曹以下、忠実な兵士たちに向かって声をはり上げた。

「よし、みんなあ、基地に凱旋するぞお！　今夜は祝宴だあ！」
「おーっ！」

兵たちが、手を打ってやんやの喚声をおくる。そんな祝福ムードの中、通信兵があわてて駆け寄ってきた。

「中隊長殿、総司令部より入電です」

通信兵が、背負っていた野外通信機をあたしの方に向けると、そこからまるでアッカンベーをするように感熱紙がカタカタと排出された。

「おお、さっそく国王陛下よりの祝電かあ。気が早いなあ、だれが報告したんだろう？」

あたしは、祝電の打たれた紙切れを抜き取るとライマー軍曹に手渡した。

「ねえライマー、みんなに聞こえるように大っきな声で読んでみて」「はっ、かしこまりました」

ライマー軍曹は、えへんと胸を張った。全員が騒ぐのをやめその声に注目する。あたしは陛下よりたまわる賛辞の言葉に胸をトキめ

かせた。

あんなにガンバッたもん、思いっきり褒めて褒めて！

「えー、では読み上げます……」

ライマー軍曹は、威儀を正し、総司令部よりの電報を声高らかに読み上げた。

「本日4時00分、王都ハ、ツイニ陥落ス。軍ハタダチニ解散シ、敵ニ投降スルコト……あれっ？」

つつく……。

ブルームーンの場合、ラーメン食べたい

北の大陸を縦断するメタルロードは、古より国と国とを結ぶ交通のみなめだ。^{いにしえ}

おもに北部山岳地帯で採掘されるレアメタル、オリハルコンの鉱石を南部商工業都市群へと運ぶために使われたことからその名がついた。

そしてこのメタルロードの中継地として栄えたのが、ブルームーンたちの故国ペーシユダード共和国なのだ。

形骸化された古式ゆかしい王制を敷く小さな国だが、交易でさえ、豊かな物資と自由な気風にあふれる平和な国だった。

半年前、極北の大国、ラゴス首長国連邦が侵略してくるまでは……。

ペーシユダードの目抜き通りを空っ風が吹き抜ける。

からーん、からん、ころろろ……

静まり返った街に、空き缶の転がる音だけがむなしく反響する。

ほんの数日前までは、この通りの両側を賑々しくショーウィンドウが飾り、流行のファッションで着飾った若者があふれ、ドーナツ店に女子高生がたむろし、パチンコ店から軍艦マーチが流れ、健康食品店に老人が列をなし、メイド服のオネーちゃんが笑顔でティッシュを配っていたのだが、ラゴス占領軍によって国中に戒厳令が布告されてからは見る影もない。

此ノ戒厳令ハ占領軍ガ其ノ兵備ヲ以テ占領スル属国ヲ警戒スル為ノ法テアル

- 一、属国ハ一切ノ政治行政司法権ヲ占領軍ノ軍衛ニ帰属スル
- 一、占領軍ハ属国ノ兵器軍事施設若クハ属国人民ノ動産不動産ヲ

占有破壊燬焼セシムル

一、占領軍八属国出入ノ陸海通路ヲ封鎖シ車両及ビ諸物品ヲ検査セシムル

一、占領軍八属国ノ報道ヲ規制シ郵便電報ヲ開緘セシムル

一、属国人民八許可無ク外出スル事此ヲ禁ズル

完全に人通りの絶えた繁華街というものは、まるでお芝居の書割かきわりみたいな滑稽さと非現実感をかもしだす。

シャッターの下ろされた建物は何だかいつもより小さく感じ、総じて、街そのものが縮小コピーされたみたいに矮小化され、スケールダウンしている。

動くものといえばエサを漁る野良犬の寂しげな姿だけだが、それもラゴス軍の軍用車両が土埃を舞い上げながら通り過ぎると、尾を巻いて裏路地へと逃げ込んでしまう。

まさにゴーストタウンというやつだ。

その色彩を失った殺風景な街並みにぽつんと一軒、営みの明かりを灯している店があった。

激辛ラーメン 珍珍軒

バラックみたいな建物の厨房にある小さな窓からは、もうもうと白い湯気が立ち上っている。雑居ビルのわずかなすき間に建つ小さなラーメン店だ。色あせた暖簾のれんが風にはたはたと揺らめいている……。

がららっ

「へい、らっしゃーい」

その暖簾を手でかき分け、建て付けの悪い引き戸を勢いよく開いて、デニムのショートパンツをはいた女の子が入ってきた。厨房の湯気がいっせいにたなびく。

店の外観からも想像できるように、狭い店内は雑然としていた。

表通りを見透かすガラス窓にはヒビが入り、それをセロテープで補修している。壁に紙でとめられたお品書きはすっかり変色し、反対側の壁には、聞いたこともないような芸能人のサイン入り色紙がびっしりと飾られていた。

そして折れ釘に引っ掛けた古いトランジスタラジオが、絶えずものの悲しい演歌を歌い上げている……。

店のカウンター席には、先客として白いブラウスを着た女の子が、すました顔でレングを口へと運んでいた。

「どうやら他に客はいないようだ。」

「ごつめーん、待ったあ?」

ショートパンツの女の子がへらへらと愛想笑いを浮かべながら隣の席に座る。

「18分と30秒の遅刻ですわ」

ブラウスの女の子が、携帯電話の時刻表示に目をやりながら冷たく言った。ショートパンツの子は、悪びれる様子もなく背負ってきたショルダーバッグを下ろすと、カウンターの中にいるこの店のオヤジに元気よく呼びかけた。

「おっちゃん、超激辛キムチラーメンひとつね!」

「お客さあん、毎回毎回それっすね。今に痔になっても知りませんよ」

「きゃははは!」

ショートパンツの子は、ひとしきり笑ってから、隣でつんとすましているブラウスの子の顔を覗き込んだ。

「あーん、ルーダーベってば、そんなに怒らないで!。開いてる病院がないか、駆けずり回ってたのよー」

ブラウスを着た女の子は、ルーダーベというらしい。

「……病院?」

そのルーダーベが、はしを止めて不思議そうな顔をした。

「ねえアシ、あなたどこか怪我でもしているの?」

アシと呼ばれたショートパンツの子が、ショルダーバッグから取り出したポケットティッシュでちーんと鼻をかみながら首をぶんぶん左右にふった。

「うっん、産婦人科をさがしてたの」

ルーダーベが、アシの顔をまじまじと見つめる。

「産婦人科に……、いったい何の用で？」

アシが、へにやっと笑いながら言った。

「だって、ほらあ、あたしたちって、いつ敵に捕まっちゃうかわかんない身でしょー。こんなに可愛い女の子が飢えた敵兵に拉致されたらどーなると思うー？　もしかして、あーんな事やこーんな事をされちゃうかも知れないじゃない。だからね……」

アシは、錠剤の入った紙袋をルーダーベの前にぽんと置いた。

「はい、これルーダーベの分」

「な、なによ、これ………？」

「避妊薬」

「ばっ」

ルーダーベは真っ赤になった。

「バツカじゃないの、あなたって人はっ！」

「きやはははは、転ばぬ先の杖って言うじゃない」

そこに超激辛キムチラーメンが運ばれてきた。

「へい、お待ちい」

「わーい」

ぱちんと割りばしを開くアシに向かって、ルーダーベがぼそりと言った。

「次の襲撃目標が決まりましたわ」

「どこお？」

アシが、ずるっと麺を吸い込みながら訊ねる。ルーダーベは、コップの水をひとくち飲んで、その唇をそっとレースのハンカチで拭いながら言った。

「王城よ……、国王陛下をお救いもうしあげます」

つづく……。

ブルームーンの場合、真夜中のランナウェイ

国境に設置された検問所を通過して、ラゴス軍の車列がペーシユダードに乗り入れてきた。

車列といっても貨物輸送用の10トン積みヘビローリーが1台と、それを護衛するためのジープが2台だけだ。このところペーシユダードでは、こういった車の往来を日に何度も見かける。

向かう先はこの国の王都リーバス、そして運んでいるのは兵舎などを造営するための仮設資材だ。

王の居城を占領したラゴス軍は、ただちにそこを彼らの南部方面派遣軍の本営として使用することに決めた。古色蒼然とした白亜の名城を、最新鋭の軍事基地に造りかえようというわけだ。彼らは、ここを足がかりとして北の大陸制覇に乗り出すつもりでいる。

そのための工事が、いま急ピッチで進められているところだった……。

引きちぎった石綿のような雲が、夜空一面に散りばめられていた。白い月が、その灰色の雲に何度も吸い込まれてはまた姿を現している……。

仮設資材を積んだラゴス軍の車列は、不快な排気ガスをまき散らしながら夜の林道をひた走っていた。王都リーバスへ向かう道は他にもあるのだが、この鬱蒼とした広葉樹林を抜けるのが一番の近道なのだ。

モスグリーンに塗られた軍用のヘビローリーは、不機嫌そうなディーゼルエンジン音を響かせながら、それでも曲がりくねった舗装路を軽快に飛ばしていた。その前後を、誇らしげに機銃を備えたジープが護衛している。

ヘビローリーには、軍服にヘルメット姿のラゴス兵が2人乗っ

ていた。

ヘッドライトの明かりに誘われた羽虫がフロントガラスに体当たりするたび、せわしなくワイパーが動きだす。窓から見える景色といえは、一定のリズムで現れては尾を引いて消えてゆく街灯の光だけだ。

音楽が流れている。

ダッシュボードの横にぶら下げたトランジスタラジオが、大昔に流行した歌謡曲を切々と歌い上げていた。しかしその音楽をかき消すほどの大声で、助手席の上等兵がハンドルを握る新兵に話しかけていた。

「そしたらよお、その男いつたい何て言いやがったと思う？」

「さ、さあ……？」

戸惑いを隠せない新兵に向かって、上等兵は笑いを噛み殺しながら言う。

「ヘイ、ジョージ、冗談言っちゃいけねえぜ、そいつは俺のおふくらだ　だってよ！　わーっはっはっは！」

クソ面白くもないアメリカンジョークを延々聞かされるほど苦痛なことはない。新兵は、うんざりしながらも仕方なしに愛想笑いを返した。

「はは……はははは……、そ、それ最高っすね」

「な、そう思うだろ？　こんど他のやつらに話してやれよ、きつと大ウケするぜ」

適当に相づちを打っていると、早くも次なるジョークが飛び出しそうな雰囲気になってきたので、これはたまらないと思い新兵は話題を変えてみた。

「あ、あの、ところで、このまえ輜重兵連隊しちゆうへいに配属された同期のやつから聞いたんすけど、なんか最近パルチザンとか名乗る連中が、我々の施設や車両を次々と襲ってるらしいっすね」

「あ？　ああ……」

さらなるジョークを話し始める機先を制されて、上等兵は少し不

機嫌そうにうなずいた。

「ふん、どうせ民兵が敗残兵が徒党を組んで悪あがきしてるんだろ
うよ。そのうち残らずとっ捕まって銃殺刑になるさ」

「そ、そうっすね……、でも聞いた話じゃあ、なんでもそのパルチ
ザンの中に騎士が混じってるとか……」

「騎士い？ この国の騎士はみーんな投獄されたよ。まあよしんば、
運良く逃げおおせたやつが1人か2人混じっていたとしてもだなあ、
騎士つつたって所詮は人間だ、そんなもんたいして脅威にはならね
えよ」

ふんと鼻をならしながら上等兵はタバコに火を付けた。嫌煙家の
新兵が、そつと窓を開ける。

「と、ところがつすね、その騎士っていうのが凄えやつらしくて、
ピンクの悪魔とか騎士団の最終兵器とか言われてるバケモンで、収
容施設だつて堂々と魔法でぶち壊してから逃亡したつて噂なんすよ」
「へっ、下らねえジョークだ。そりやおめえ、だれかが話をつくつ
てんだよ」

上等兵は、笑いながらふつと煙を吐き出した。

と、そのとき不意に前を走るジープのストップランプが点灯
し、つられてローリーも急停車する。

「おっと、何だあ？」

見ると、1台の貨物用トラックが斜めになって進路を塞いでいた。
どうやら車輪が側溝にはまって立ち往生しているらしく、運転手ら
しき男が途方に暮れていた。すかさずジープの兵が駆け寄り、何事
か話しかけている。それを見て、ローリーの上等兵は不機嫌そうに
舌打ちした。

「ちっ、戒厳令を聞いてねえのかよ、馬鹿野郎が……。民間人は勝
手に出歩くな、つってんだろーが」

やがてジープの2人は、運転手と一緒にあってトラックを押し始
めたがビクともせず、仕方なくヘビーローリーの2人へ向かって手

招きをした。

「ちくしょう、お呼びがかかったぜ……。仕方ねえ、行くぞ」

上等兵は、新兵をうながしてローリーを降りると、くわえていたタバコをぶつと吐き捨てた。

近くで見るとそれは宅配用の中型トラックで、運転手は若い男だった。その気弱そうな運転手に上等兵が食ってかかった。

「おい、てめえ、こんな時間に車を走らせるとはいいい度胸じゃねえか。戒厳令のことは知ってるよなあっ？」

「す、すみません。どうしても朝までに生鮮品を届けなくちゃならなくて……」

申し訳なさそうな顔でしきりに侘びる運転手を見て、上等兵は意地悪く言った。

「生鮮品だあ？ ようし、荷台の中を見せてみる。もしおかしな物でも積んでいやがったら、てめえ、この場で銃殺刑だからな」

そう言っただけは新兵に目配せをした。やがて荷台の扉がゆっくりと開かれる……。

「きゃははは！ 生鮮品でえーっす！」

突然、荷台の中からはーんと飛び出してきたのは、ピンク色の鎧を身につけたアシだ。彼女は両手に一挺ずつ真つ赤なベレッタを携えていて、その銃口が上等兵と新兵の眉間にぴたりと据えられる。

「おいこらあ、動くと、じゅーさっけーだぞ、ひやはは！」

続いて自動小銃を構えた男たちが次々と荷台から飛び出してくる。そして4人のラゴス兵は、抵抗する間もなくあっさり取り押さえられてしまったのだ。

「くそっ、例のパルチザンが現れやがった！」

異変に気づいた最後列のジープが、車を発進させようとギアを口ーに入れる。しかしその運転手の首すじに、刃物の冷たい感触がひたと押し当てられた……。

「おっと、動かないでいただけます？」

「……き、貴様いつの間に」

驚愕した運転手がルームミラーに目をやると、ピンク色の鎧を着たルーダーベが後部座席で仁王立ちになっていた。彼女は、キューティクルぴかぴかのロングヘアを、片手でふわっとかき上げながら言った。

「私、基本的に箸より重たい物は持ちたくありませんの。手間をかけさせないでほしいですわ」

騎士剣を突きつけられた運転手は、顔を引きつらせながらゆつくりと両手を上げた。その隙に、助手席の兵が腰の拳銃にそっと手をのばす……。

とたんに、騎士剣の刀身からぶわっと炎が吹き上がった。

「ここでファイアーダンスを躍りたいのなら、それでもよくってよ！」

「うわあ！ 熱ちい、熱ちい、熱ちいーっ」

たまらず2人のラゴス兵はジープから転がり出た。そこを駆けつけたパルチザンたちが取り押さえる。

「ふん、他愛のない」

ルーダーベは、すんとジープから飛びおりと騎士剣を鞘におさめた。

「現金輸送車ごーだつ、かんりょー！」

アシが、左右の太もみに巻いたガンベルトに赤いベレッタを押し込みながら近づいてきた。ルーダーベは、つんと澄ました顔でヘビローリーの荷台を見上げる。

「あら、積荷はすべて、プレハブ兵舎を建てるための仮設資材と聞いてますわよ」

「なーんだ、軍資金調達のために襲ったんじゃないのかー」

「ちがいますわ。これを使って、王城に乗り込むのよ」

そこにパルチザンのリーダーが駆け寄ってきた。

「おい、お二人さん、こっちの準備は完了した。あんた方は、城内に侵入するまでこの荷台の中に隠れていてくれ」

パルチザンたちは、全員ラゴス兵から奪った軍服に着替えていた。これで味方のフリをして城の警備を突破しようというわけだ。

「わかりましたわ。さあアシ、さっさと荷台に乗り込みましょう」

「何だか、かくれんぼみたいでワクワクするねー」

ばか言ってるじゃないわよと愚痴をこぼしながらリーダーベが荷台の後ろに回り込み、扉のかんぬきを外す。そしてアシと2人で勢いよく取っ手を引くと、錆びついた悲鳴をあげて両開きの鉄製扉がゆっくり開かれていった……。

「こ、これは……？」

「何これえ？」

2人は、思わず眉をひそめた。ローリーの荷台には、電話ボックスほどの大きさをした仮設トイレがぎっしりと詰め込まれていたのだ。

「えー、これってトイレじゃーん！」

リーダーベが、たちまち気色ばんでリーダーに食ってかかる。

「ちよつと！ 私たちに、この中で隠れていると仰いますの？ 平民のアシはともかく、私の家は代々近衛騎士をつかさどる子爵家の家柄ですよ」

「あーん、アシの家だつて3代続いた定食屋さんだよー。こんな、ばつちい所に入ったら保健所に怒られるうー」

タハハと苦笑しながらパルチザンのリーダーは、ひたいの汗を拭いつつ2人をなだめた。

「いやあ、申し訳ない。とにかく作戦はもう始まっているので、城に着くまでのあいだ辛抱してもらえまいか。全ては国王陛下のためということ……」

さすがに国王の名を出されては、これ以上逆らうわけにもいかず、2人は、しぶしぶ荷台の中へもぐり込んだ。

「まったく、信じられせんわ」

「うわー、くちやいよお……」

こうして、ひと悶着あったがやがて荷台の扉は閉じられ、ラゴス兵に扮したパルチザンの車列は、何事もなかったかのように走りだした。この林道を抜けると、めざす王城が視界の先にその寝殿造りの壮麗な姿を現すはずだ……。

「……ねえルーダーベ」

「なによ？」

「アシ、おしっこしたくなっちゃったー。ここでもいいかな？」

「ダメよ！」

つつく……。

ブルームーンの場合、キャッスルでハッスル！

パルチザンに乗っ取られたラゴス軍の車列は、まるで死者を運ぶ葬列のようにひっそりと夜の道をひた走った。

途中、2度ほどラゴス軍の検問に引っかけたが、自軍の車両とすることもあつて全く疑われることなく通過できた。

やがてラジオの深夜放送がそろそろ宗教番組に切り替わろうかという刻限、一行はようやくペーシユード王の居城にたどり着いた。その城は、よく観光ガイドブックなどで見かける壮麗な寝殿造りの古城だった……。

城をぐるりと囲む塹壕^{えんこう}に、湿気った闇の息づかいが満ちている。

月の姿をゆらゆらと游がせる水面が、わき上がるような蛙鳴^{あめい}に包まれていた。

この城の背後には、北の大陸で3番目に長いといわれる大河、クリヨン川が深い碧色の水を湛え、優雅なせせらぎを奏でていた。その雄大な流れの対岸には、電飾の星を散りばめた王都リーバスの繁華街が、戒厳令下にもかかわらず不夜城のごとく華やき、酔いしれるラゴス兵たちを、股を広げて待ちかまえていた。

城門より内へと導く跳ね橋は下りたままだが、代わりに物々しいバリケードが築かれ、つねに十数人の歩哨が出ずっぱりで夜詰めしていた。

先頭を走るジープがバリケードの前で停車すると、すかさず歩哨の兵が駆け寄ってくる。

しかし、深夜ゆえ退屈しきっていたのであろう、その歩哨は提示した命令書をろくに見もしないでつき返すと、堰を切ったように話しはじめた。

「やあ、遠いところをご苦労だったな、ここは初めてかい？」

「いや、3度目だ。ところで、おい、兵舎もだいぶ出来上がったよ
うじゃないか」

「まあな。ここの兵舎が完成したら、さっそく本国からお偉いさんがやって来るんだとよ。うわさではアーリア族のドウルジ総督がこの司令官になるらしいが、まあ俺たち下っ端の兵にとつちやあ誰が派遣されて来ても同じことさ……。そんな事よりここは、まさに天国だぜ。非番のときにはよ、城の裏側にある水門から船で川を渡って、向こう岸の繁華街にくり出すんだ。あそこには綺麗なネーちゃんがいっぱいいるぜ、おまけにこちとら占領軍だから、もうやりたい放題やれるしよ、ひっひっひ……」

「ほう、そいつあご機嫌だな。でもまあ、あまり派手にやらんことだ、パルチザンの連中に目を付けられたら厄介だからな」

「へっ、パルチザンなんか眼中にないぜ！」

「そうかい、なら機会があったらそのうち一緒に酒でも飲もうや。じゃあな……」

まだ喋り足りなさそうな歩哨の兵を後に、パルチザン一行を乗せた車列は城内へと進入した。

ペーシュダードの王というのは、形式上君主として扱われているだけで実際の立場は貴族院の一議員にすぎない。国家の政を運営するのは、あくまで選挙によって選ばれた宰相なのだ。よってこの城は、戦時に王が立て籠もる砦などではなく、おもに式典を執り行う斎場や外賓を接待する迎賓館としての役割を担っていた。

小高い城壁に囲まれた敷地に入ると、まず雄大な庭園がひろがっている。

この庭園には中央に大きな池がありそこから小川も流れている。この場所はふだん一般市民にも開放され、観光客やピクニックに訪れる親子連れ、ジョギングやバードウォッチングをする人などで賑

わっていた。

そして庭園の中央をはしる舗装路を真っ直ぐ抜けるとまず礼拝堂があり、その奥に豪華な2階建ての宮殿がそびえ立っている。建物を形づくる白磁の壁には美麗な装飾が施され、内部を飾る調度品の数々もみな贅を尽くしたもののばかりだ。

宮殿の左右にはそれぞれ西の対、東の対とよばれる対殿があり、透廊すきりょうという壁のない廊下で繋がっている。そして宮殿の奥には、北の塔という巨大な石積みの塔が威風堂々、天を指してそびえ立っていた。

兵舎が造営される敷地は、この東の対と城壁のあいだを埋める雑木林の奥にあった。パルチザン一行は、いったんそこへ向かうと見せかけて雑木林の中に入り、そこで車を乗り捨てた。

先頭のジープから飛び降りたパルチザンのリーダーが辺りを警戒しながらすばやくヘビローリーの扉を開くと、リーダーベとアシがおぼつかない足どりで姿を現し、そして荷台から降りるなりへたとその場に倒れ込んだ。

「お、おい、大丈夫か？」

「私、もうダメ、この中のアンモニア臭にすっかり酔ってしまったわ……」

「あーん、お外の空気が美味しいよう」

まるで陸揚げされたマグロみたいにくでつと横たわる2人を、パルチザンのリーダーが苦笑しながらも懸命になだめた。

「いやあ、済まなかった。積み荷が何であるかも調べずに車両を強奪したのは我々の不手際だ。いやほんと、お詫びのしようもないよ、ははは……。ところでお2人さん、もうすぐ夜が明けてしまうので、その前に作戦を完了してここを脱出したいのだが、どうだろう、気を取り直してもうひと頑張りしてもらえまいか？」

リーダーが平身低頭して頼み込むので、仕方なく2人はのろのろと身を起こした。

「……ああ、そういえば私たち、ここしばらくちゃんとしたものを口に入れてませんわね」

「わかったわかった、この作戦が終了したら何でも好きなものを食べさせてやるよ」

「何でもと仰いますけど、私はふだんミシユランの3つ星がついたお店にしか入りませんわよ」

「アシは、お寿司をお好みでお腹一杯食べたーい」

「よし了解した。でもまずは任務を完了しなくてはね、さあ、そうと決まればいつまでも座ってないで、はい、立った立った」

絶対に約束よと言いながらルーダーベとアシは立ち上がり、お尻に付いた汚れをぱたと手で払い落とした。その間にパルチザンたちは、全身黒ずくめのボディースーツに着替える。そして頭から黒い覆面をすっぽり被り、まるで影法師のようになったリーダーが、2人に照明弾を手渡しながら言った。

「いつものように我々は逃走経路を確保しておくから、陛下を救出したらこれで合図してくれ」

「分かりましたわ」

「がつてん、しょうちのすけー」

やがてパルチザンたちが闇の中へ消えると、残されたルーダーベとアシがため息をつきながらライトアップされた宮殿を見上げた。

「さてと……、どうやってあの宮殿の中に忍び込むかですけど」

「はいはい、アシちゃんに名案がありまーす！」

まるで先生に質問された生徒みたいにアシが右手をぴーんと挙げた。その姿を見てルーダーベがやれやれと肩をすくめる。

「あなたの名案が、名案であつた例しはないわ」

「あー、ルーダーベってば、ひどいんだー」

「でも、まあ一応は聞いてあげる、さあ言つてごらんなさいな」
「へへへ……」

アシは、得意げに鼻をずーっと嚙りながら話しはじめた。

「実はねー、去年の夏頃、とつぜん宮殿の空調設備がイカれちゃってさあ、それでアシちゃん、ジョバンニのくそジジイに頼まれて仕方なく配管ピットにもぐり込んで修理をしたわけよ」

「あなたって騎士などやめて工事屋さんかボイラー技士にでもなった方が、よっぽど性に合っているんじゃないかって？」

「でへへ、アシもそう思うー。でねでね、そのときお城の設計図面を見たアシちゃんは、その内容を残らずこのゆるゆるな頭脳にインプットしちゃったわけよ」

「つまりは配管のピットを伝って宮殿内部に侵入しようということね？」

「そゆこと。アシが宮殿に忍び込むルートとしてお手頃な配管ピットを的確にチョイスしてあげるから」

左手を腰に当て、右手の人さし指をフリフリしながら得意満面に微笑むアシを冷やかな目で見ながら、ルーダーベはふんと鼻を鳴らした。

「たいして名案とも思えないけど……、まあいいわ、他に良い作戦も思い浮かばないし、それでいきましよう」

「じゃあ決まりね！」

アシが指をぱちんと鳴らした。

つづく……。

ブルームーンの場合／天使の微笑み

ルーダーベは、貴族アウシェダル家のひとり娘だ。

アウシェダル家の先祖は、ペーシュダード王がまだ本物の王様だった頃から代々近衛騎士としてこれに仕えてきた。近衛騎士とは国王直属の騎士団で、複雑な命令系統がなく、王や王族が直接采配を振るって動かすことのできる特殊な部隊だ。よって昔から近衛騎士になることは大変名誉とされており、また彼らのほとんどが爵位を授かり、いくらかの領地を分け与えられていた。

やがてペーシュダードが民主化されてからもこれら貴族階級はそのまま残り、領主としての地位は失ったものの、彼らの多くが貴族院議員として名士の家柄を保ち続けた。

そしてアウシェダル家は、5等爵の4番目、子爵の家柄なのだ。

だからルーダーベは、ちょっぴりお高くとまっている。

けっして本人に悪気はないのだが、幼い頃から召使いたちにかしずかれて育ってきたせいもあり、自然とわがままな性分が身についてしまったのだ。

とくに彼女は、待つことが大嫌いだった。

「ちよつとー、まだですよ!？」

夜目にも手入れのゆきとどいていると分かるロングヘアをふわっとかき上げながら、ルーダーベが尖った声を出した。

「ふあいふあい」

一方、それに答えるアシは、マグライトを口にくわえたまま壁と向き合っている。両手にドライバーと六角レンチを握りしめ、それでもって彼女は、いま宮殿裏手の壁に取り付けられた室外機を取り外しているところだった。

「まーったく……、この悪趣味な鎧には辟易しますわ。これをデザ

インした人って、暗中での戦闘をまったく視野に入れてませんわね。だってそうでしょ？　こんなに目立つ恰好をしていては、それこそ敵に自分の居場所を知らせるようなものじゃない。だいたい、この節操のないシヨッキングピンクって、どう考えても清楚な私には似合わないのよ」

あなたは似合っていいわね、とアシに言うと、彼女は肩の高さで切り揃えたブロンドを揺らしながら、うんうんとうなずいた。

「ひゃっひゃっひゃ」

「ちよつとアシ、物をくわえたまま笑わないでくださる。ってほらあ、口の端からよだれがこぼれてるじゃない！」

ルーダーベがレースのハンカチを取り出してアシの口を拭おうとしたとき、不意に彼女が立ち上がった。

「やったー、作業しゅーりょー」

「きゃあ」

あやうくアシに頭突きを食らわされそうになったルーダーベは、仰け反って尻餅をついた。

「危ないわね、急に立ち上がらないでちょうだい」

「きゃはは、ごめんごめん。でもほらあ、侵入口ができたよー」

見ると、小さな本箱ほどもある室外機を壁に固定していたボルトが残らず外され、配管やら電気コードもきれいに切断されていた。そしてその四角い機械をずりずりつと手で押しのけると、宮殿内部へと続く配管ピットが、その真つ黒い口を不気味にのぞかせたのだ。這って進まなければ通れそうもないその狭いスペースに、しかしアシは何の躊躇もなくスルリともぐり込んだ。

「ちよ、ちよつと待つてよ」

慌ててルーダーベが後を追う……。

その配管ピットは、宮殿内部の天井や床下、壁と壁とのすき間とあった、わずかなスペースを迷路のようにつなげて造ったメンテナンス用のピットで、当然のことながら、ただでさえ狭苦しい中に給

排水の管が束になって延びている。そして、その配管のジョイント部分からポタポタと水が漏れだし、小さな水たまりをつくって、這いつくばるルーダーベたちの手足を汚した。さらに内部にはカビくさい淀んだ空気が充満していて不快な事このうえない。

たちまちルーダーベの機嫌が悪くなる……。

「ちょっとアシ、あなた自分が今どの辺りにいるか、ちゃんと分かって先へ進んでるんでしょうね？」

「あん……」

「中は真っ暗だし、迷路のように入りこんでいて……、こんな所でもし迷子にでもなったら、私たちこのままミイラになってしまふのよ」

「やん……」

「ねえ、さっきからなに变な声を出しているの？ もっとまじめにやって下さらないと困ります」

「だって、ルーダーベがアシのお尻をつつ突くんだもん」

「あなたがグズグズしているからでしょ。私、こどもの頃から狭い所は苦手なの、ほらほら、もっと早く進んでちょーだいな」

またまたルーダーベがマグライトの先でアシのお尻をつんつんと突いた。

「やーだー、もう！ あんまりつつ突くと始まっちゃうよー」

「始まるって……何が？」

「生理」

「げげっ！ 冗談じゃないわ」

「きやははは、貴族のお嬢様が、げげっ！ だってー」

それから30分ほどのあいだ2人はピットの中を這い回った。彼女たちが足にはくプレートブーツは二ーハイの長さがあるので、膝小僧をすりむくことはないが、しかし四つん這いの姿勢を長く続けるのは非常につらい。

やがてルーダーベがそろそろヒステリーの兆しを見せはじめたと

き、アシが不意に前進を止めた。勢い余ったルーダーベが顔面からアシのお尻に激突する。

「うぷっ」

「きゃん！」

痛ったーい、とルーダーベが鼻の頭をおさえながら抗議した。

「ちよつと、急に立ち止まらないでもええです。いったい、どうしたのよ？ ま、まさか……本当に生理が始まったんじゃないでしょうね」

「ちがうよー、確かこの辺に一箇所、出口があつたような気がしたんだけど……」

頭の中にインプットされている宮殿内部の図面を必死に思い起こしながら、マグライトで辺りを照らしていたアシが、不意に「あつた！」と叫んだ。彼女がライトで示すその先にはコンクリート壁が一部引つ込んだ部分があり、そこに小さなステンレス製の扉が隠されていたのだ。

「これこれ！ こっから外に出られるよー」

そう言つてアシがその扉に這い寄り、小さな取っ手をぐいっと引いた。

「それっ！」

少し錆び付いた音をさせて扉が勢いよく開く。でも次の瞬間、彼女は思わず落胆の声をあげてしまった。

「あれれー、おつかしいな。扉の向こう側を、さらに木の壁がふさいでる」

首を傾げるアシを押しつけて、ルーダーベが怪訝そうな顔をのぞかせてきた。

「ねえ、その先はいつたい宮殿の何処につながっているの？」

「えーと確か、国王陛下の御休息の間だったと思うけど……」

進路をふさぐ木の壁を、人さし指の爪でコリコリ引つかきながら、アシが間延びした声でたずねた。

「ねー、これ、どーしよーかー？」

そのやる気のなさそうな声を聞いて、はやくピットから抜け出さなくてはイライラしているルーダーベが、たまりかねたように言った。
「えーい、もう、そんな壁ぶっ壊しちゃいなさい！」

この城の宮殿は、基本的に国王とその家族の住居として建てられたものだ。

そのなかでも御休息の間は、王様が一人つきりでくつろげる特別な空間なのだ。その内部は超高級ホテルの最上級スイートルームなみにゴージャスで、しかも国王が趣味で集めている貴重な骨董品の数々が所狭しと飾られていた。

今、この御休息の間にある王様お気に入りの籐椅子にふんぞり返っているのは、ラゴス軍から司令官代行として派遣されているガンツ大佐だ。彼には、新しい司令官が赴任してくるまでに、ぜひともやっておかなければならない事があった。

それは、目の前の壁に飾られている一枚の絵画を持ち出す事である。

数あるペーシユダード王のコレクションの中でも、ひととき有名なのがこの絵画『天使の微笑み』だ。大昔にさる高名な画家が描いたもので時価に換算すれば数億ゴールドはくだらないという名画だ。ガンツ大佐は、自分の任期が終わる前に、何とかこの絵画を盗み出せないかと思案していたところだった。

「うん、やつぱりあれだな、この場所には贋作を掛けておくとして、それで本物は産業廃棄物を運搬する車両に紛れ込ませて持ち出せば分からないだろ。うん、そうしよう」

かなり長いこと考え込んだ割には、どうでもいいようなありきたりの作戦を思いついた彼は、それでも満足そうな微笑を浮かべるとその厚ぼったい唇にくわえた高級葉巻を嬉しそうにくゆらせた。

「ふっふっふ……」

と、その時。

ペーシユダードの重要文化財にも指定されているその貴重な絵画の、ちょうど天使の顔が描かれている部分がバリベリッと破かれ、そこから女の子の顔が、ぬうつとこちらを覗き込んだ。

「な……………」

そして彼女は、呆れて口をパクパクさせているガンツ大佐と目が合うと、にーっと蠱惑的な微笑みを浮かべた。

「はいはい、アシちゃんであーす」

「お、おまえ……………」

ガンツ大佐がやつとのことで何かを言おうとしたとき、今度は天使の横に描かれたマリア様の顔にボンと穴があき、そこから真っ赤にペイントされたベレッタM92がその38口径の銃口をのぞかせた。

と同時に、アシがとっておきの啖呵をきる……………。

「おい、こらあ、おまえ、ジタバタ騒ぐとドテっ腹に風穴あけてからタンポン突っ込んで血を残らず吸い取ってやるぞ！」

その、あまりに下品なセリフにガンツ大佐は思わず口をあんぐりと開け、そこから高級葉巻がポトリと落ちた。

「きやははは！」

つづく……………。

ブルームーンの場合／本気と冗談は紙一重

「えーっ、これってアシのせいなのー？」

完膚なきまでに破壊され、いまやほとんどフレームだけの姿となった時価数億ゴールドの名画を指さして、アシがふくれっ面で文句を言った。

「あら、あたなたが破いたんじゃないっけ？」

「だってえ、ルーダーベがアシのお尻突っつきながら壊しちゃいなさい！　って怒鳴るからあ……」

「さあ、私は知りませんわよ」

ねー、あんたどう思うー？　と、籐椅子にがんじがらめに縛りつけられているガンツ大佐へ向かってアシが顔を寄せた。大佐は、泣いているのか笑っているのか分からないような表情で、へどもとと答えた。

「……ま、まあ、そうですねえ、この場合さしずめ貴方が実行犯であちらにいらっしやる方が教唆犯きようさくということになりましたか。刑法上は、実行犯を正犯としますので、どちらかと言えば貴方の方が罪が重いような……」

それを聞いてアシが怒った。ガンツ大佐の襟首をつかみ、ベレッタの銃口をこめかみにぐいと押しつける。

「どーして、どーしてえー、アシは命令されて仕方なくやっただけなのにいー。ひっどーい！」

「落ち着きましょう、ね、ね。仮に貴方があの名画のことを知らずに破いてしまった、つまり刑法上、善意の者であった場合、じゅうぶん酌量の余地はありますから」

すると今度はルーダーベが、「あら……」と不機嫌そうな顔で近づいてきた。そしてガンツ大佐を見下ろしながらスラリと騎士剣を抜き放った。彼女の剣はつねにお抱えの研ぎ師が良好な状態にメン

テナンスしているので、プロの板前さんが使う包丁なみに良く切れる。その研ぎ澄まされた刃先が、ガンツ大佐の首筋にピタリと押し当てられた。

「いまの仰りよう、聞き捨てなりませんわねえ。それじゃあ何ですの、この重要文化財損壊の責任は私の方にあるとでも？」

「いえ、けっしてそのような」

「ねー、こいつ殺しちゃおーかー、唯一の目撃者だし」

アシが言うと、

「そうね、この人が死ねば名画を破損した犯人は永久に謎のままですものね」

とルーダーベが賛成した。

「ま、待って下さい。命ばかりはどうか……」

そう言いながらガンツ大佐は、彼女たちが本気で殺すと言っているのかを判断するために、2人の顔を素早く見比べた。

ルーダーベは良家のお嬢様らしく、いかにも冗談の通じなさそうな顔をしている。あら、私はいつだって本気よ、みたいなホンキの『ホ』の字が端正な顔からもしっかりと読み取れるのだ。

こいつは、きっと本気で人を殺すに違いない。

一方、アシの方は、生まれながらに冗談で生きてるような雰囲気がある。本気になるなんてバツカミたい、と今にも笑い出しそうだが、しかしその冗談にまったく歯止めが掛かっていない気もする。こいつは、きっと冗談で人を殺すタイプだ。

どちらにしても、こいつら相当にヤバイ！

そう直感したとき、ガンツ大佐の命乞いは本物に変わった。

「こっ、こっ、殺さないで下さい。あなた方の欲しい物は何でも差し上げます。あなた方の知りたい事は何でもお教えします！」

「あらそう……」

「ふーん……」

ルーダーベとアシが、息が吹きかかるほどガンツ大佐に顔を近づ

けてきた。てらてらと光るリップグロスの奥から、フルーツみたいな甘い香りが漂ってくる……。

そして2人の普段より1オクターブ低い声が不気味に重なった。

「じゃあ、王様の居場所を教えてください……」

「き、北の塔の地下です！」

そう答えると同時にガンツ大佐は、じよろつと失禁した……。

城壁に囲まれた敷地の最奥部に、北の塔はあった。

石を積み上げて造られた無粋な四角柱の高層建造物だ。

塔屋の部分は三角屋根になっていて、そこに古めかしい機械式時計がはめ込まれている。また中層階に張り出したテラスには、対空用の機関砲が据え付けられていて一瞬だけ観光客の度肝を抜くが、これはこけ脅しで、王室の式典で空砲をぶっ放すこと以外に使用された例はない。

いずれにしても、一見すると物々しい外観の石塔だが、その実態は単に食料などを備蓄する倉庫にすぎなかった。

しかし今、この塔を警備するラゴス兵の数は、倉庫番をするにしているはいささか多すぎると言える。やはり北の塔の地下に、王が監禁されているのだ……。

「ねえ、どうしよう、あの小便たれをクローゼットへ押し込んだとき、おしっこが手に付いちゃったあ」

「きやつ！　ちよつと、アシ、その手を私の鎧で拭わないでちょうだい！」

「ねー、ハンカチ貸してー」

「やーよ、汚い」

アシは、うーっと唸りながら辺りをきよろきよろ見回していたが、回廊の壁にラゴス連邦の国旗が飾られているのを発見し、それで丁寧に手を拭った。

「どうする、また配管ピットの中に潜るう？　地下にある下水道を

經由すれば北の塔に出られるかもよ」

「絶対にいや！」

ルーダーベが、ロングヘアを揺らしてふんとそっぽを向いた。アシが困ったような顔をする。

「えー、じゃあどーするのお？」

「決まってるじゃない……」

まなじり

ルーダーベが、きつと皆を決すると一瞬だけ魔力のオーラがあふれ、彼女の体がぼうつと青白く光った。

「根性で、正面突破するのよ」

アシの頭が、バネの壊れた電気スタンドみたいにカクンと垂れた。「結局、最後はそうなるのかあ……」

つつく……。

ブルームーンの場合、アウト・オブ・コントロール！

無粋な石造りの塔は、拉致したお姫様を監禁しておくにはちよつぴり風情がないが、なにせ囚われているのはカイゼル髭をたくわえた肥満気味のオッサンなので、外観の善し悪しはこのさいどうでもよい。

むしろ厄介なのは、ケーキにたかる蟻みたいにびっしりとすき間もなく配置された、警備の兵士たちだった。

とくに、2階テラスから正面入り口を見下ろす重機関銃と、その入り口の両脇をかためるショットガンの兵士2名は、相当ヤバイ。重機関銃は、ベルト状になった弾帯が途切れるまで撃ちまくるところができるし、ショットガンもどうやらポンプ・アクションの要らない連発式セミ・オートマチックのようだ。

塔への入り口は一箇所きりしかないので、ルーダーベとアシが正面突破を図るには、どうしてもこの銃火器の洗礼を受けなくてはならないのだ。

というわけで……………。

「ねえ、これ、止めにしな―い？」

いかつい装甲兵員輸送車の運転席に上半身をツツコんだ状態で、アシが言った。

「他にもつと良い作戦があるってばあ。ねえ聞いてるう？ 例えばさあ、もう一度地下ピットに潜って電気ケーブルを切断しちゃうとかさあ……………」

「いいから、さっさとなさい！」

「あん、もう。ルーダーベってば強引なんだからあ」

ここは、仮設兵舎の建設現場からそう遠くない場所にある、重機

の格納庫。

そのプレハブ造の倉庫の中は真っ暗で、工事用のユニックやらブルドーザーが無造作に乗り捨てられていた。

北の塔に重機で突っ込む。

塔をとりまく嚴重な警備を目にして、ルーダーベが導き出した作戦がこれだ。

アシは、冗談かと思って彼女の顔を覗き込み、そしてぶるいつと身震いした。ルーダーベって熱い女だ。直情径行と言ってもいい。つねに本気のオーラを身にまとったお嬢様、それがルーダーベという女の子だ。

当然のことながらアシの反論はすべて却下され、そして2人はこの格納庫に忍び込んだ。

そのとき偶然見つけたのが、この装甲兵員輸送車なのだ。

6輪のハーフトラックを改造したもので、分厚い装甲版に覆われたその姿は、まるで迷彩がらの巨大なトロッコみたいだ。屋根はなく、窓も、覗き穴でいどの小さな視察口が運転席に取り付けられているだけだ。

まったく、車というよりは、移動する弾除けといった方がぴったりの感じがする。

アシは今、その装甲兵員輸送車の運転席を覗き込んで、何やら作業をしていた。ハンドル下側にあるパネルを取り外し、引っ張り出した電気コードをいじくり回しているのだ。

闇の中、彼女の指先を照らすマグライトの明かりだけが、まるで庭園の芝上に設置された常夜灯みたいに、ぼんやり灯っていた。

車の外では、ルーダーベが騎士剣を手に油断なく見張りをしている。夜中とはいえ、いつラゴス兵がここに入ってくるか分からないのだ。

彼女はイライラしながら、ドアから突き出しているアシの下半身

を見下ろした。

「ちよつと、まだですよ?」

「むーう、軍用車はかっぱらいずらいなあ……………あつ、そうだ。ねえねえ、こんなのつて、どお? 水道管に睡眠薬を注入してさあ、みんなが寝入ったところを潜入するの。それなら一切ドンパチやらずに済むよ」

「無駄口たたいてないで、早くしてくーだーさーいーなっ」

ルーダーベが、プレートブーツのつま先で、アシのお尻をぐりぐりした。

「やーん、やめてよお…………」

と、そのとき装甲兵員輸送車の直列6気筒エンジンがグオーン!と唸りを上げ、マフラーから真っ黒い煙が吐き出された。

「やった、エンジン掛かったー!」

アシが喜びの声をあげる。

そして彼女が運転席から立ち上がるうと腰を浮かせたたん、すかさずルーダーベが、プレートブーツのかかとでそのお尻をぐいと助手席側に押し込んだ。

「きゃん!」

アシは、はずみでゴロンと一回転して、助手席のドアにごつんと頭をぶつつけた。

「痛ったーい、ルーダーベのばかあ! 鬼い! 悪魔あ!」

アシの抗議にはかまわず、ルーダーベが運転席に乗り込んでバタンとドアを閉める。涙目になっておでこをさすっていたアシは、それを見て驚きの声をあげた。

「えーっ、ルーダーベが運転するのお?」

「何よ、悪い?」

「だってえ、あんたつて運転ちよー下手じゃん」

アシが心配そうに眉をひそめると、ルーダーベは、コラムシフトをかくんと動かしながら言った。

「一般道を走るわけじゃないからいいのよ。それよりもアシ、あな
たこそ、その機関銃でちゃんと私を援護してちょうだいね」

この装甲兵員輸送車には、ブローニングM2機関銃が搭載されて
いるのだ。

ちょうど助手席から立ち上がると、防護盾に囲まれた位置に据え
付けられた機関銃のグリップが握れるようになっていて。その銃座
を見上げながら、アシがこくつとうなずいた

「うん、分かった……」

「じゃあ、行きますわよ」

ルーダーベが、べたつとアクセルを踏んだ。とたんに装甲兵員輸
送車が、猛スピードで後退する。

勢いよくバックした車は、そのままテール部分から壁に激突した。

「きゃあ！」

ガチャンともの凄い音が倉庫内に反響し、はずみで兵員室の乗降
用ドアが外れて、ガラんと床に落ちた。

「あわわわわ！ ギアがバックに入ってるってばあ！」

「うるさいわね、ちよつと間違えただけじゃない！」

ルーダーベは、目をつり上げながら乱暴な操作で再びシフトチェ
ンジをした。どうやら、ハンドルを握らせてはいけないタイプの人
らしい。

アシは、慌てて車から降りようとした。

「アシちゃん、いち抜けたー！ ここで降りるね」

「させるか！」

アシが逃げるよりわずかに早く、ルーダーベが、べこんとアクセ
ルを踏み込んだ。

がりつと土を噛んで、総重量約7トンの車体が勢いよく前に飛び
出す。アシは座席の上でころんとひっくり返し、ジタバタともがい
た。

「やー、降ーろーしーてえーっ！」

東の空に、いつの間にか金星が輝いていた。明けの明星というやつだ。

夜空いっばいに散りばめられた星々の瞬きは、見つめていると、何やら神秘的な音が聞こえてきそうなほどに壮麗な眺めだ……。

そんな真夜中の静寂を破り、ドッガン！ と音を立てて格納庫のシャッターが吹っ飛んだ。

つづく……。

ブルームーンの場合、ピンクの悪魔

世界は一家、人類はみな兄弟

と書かれた、平和記念モニュメントの石碑に寄り掛かって、ラゴス軍の兵士が物憂げにタバコをふかしている。

ゆっくりと吐き出された煙は、巨大な卒塔婆のようにそびえる北の塔のシルエットへと吸い込まれてゆく……。

辺りは、真夜中の静寂に包まれていた。

いや、よくよく耳を澄ませば、涼しげな水音が聞こえてくる。

北の塔から石積み之城壁をへだてた向こう側には、クリヨン河がその水面にゆらゆらと月を游がせながら優雅なせせらぎを奏でているのだ。

「……平和だねい」

そうつぶやくと兵士は、ヘルメットを傾けて足下に火の付いたタバコをぷつと吐き捨て、軍靴でじゃりつと踏みにじった。

ドーンという衝撃音が静寂を破ったのは、その時だ。

「なんだ？」

兵士は、慌てて顔を上げ、きよろきよろと辺りを見回した。

「オイ、今ノ音ハ何ダ？」

すぐに無線機のイヤホンから、警備班長のどなり声がした。すると間髪を入れず、別な兵士の切迫した叫び声が機銃音と重なって聞こえてくる。

（パタタタタッ）

「テッ、テッ、敵襲デスッ！」

「オイ、何ガアツタ？ モット詳シク報告シロ！」

（ズダダダーン）

「ウワーッ！」

緊迫した無線でのやり取りを耳にして、兵士は慌てて担いでいた自動小銃を肩から降ろした。その拍子にイヤホンがぼろっと耳から外れる。すると、今まで無線機を通して聞こえていた銃声が、存外自分のすぐ近くで鳴っていることに気づき、彼は驚いて銃を腰だめに構えた。

「…………どこだ？」

彼が背にする御影石の石碑は、高さ5メートルほどもある。その固い表面に背を押し付けて、彼は落ち着かない様子で何度も左右を覗いた……。

グオーンという車のエンジン音と樹木を乱暴に薙ぎ倒す音が、次第に近づいて来るのが分かる。ヘルメットのすき間からつつつと冷や汗が伝い落ちた。

「どこだ？ ……どこから来る？」

闇の中、敵の姿は見えず、ただ野太いエンジン音とキャタピラが回転する金属的な摩擦音だけが猛スピードで接近してくるのだ。兵士は、恐怖のため息を荒げ視線を游がせた。

「どこだ、どこだ、どこだ？」

どこだあーっ！

ついに彼は恐怖に絶えきれなくなり、手当たり次第に銃を乱射しはじめた。

タンツ、タンツ、タンツ、 タンツ、タンツ、タンツ

「ひやはははーっ！ 死ね死ね死ね死ね、みんな死んじまえーっ」

と、そのときドガンという耳をつんざく衝突音が、背後から彼を襲った。

「ひっ」

驚いてふり向いた兵士が目にしたのは、ゆっくりと自分に倒れかかってくる黒々とした石碑のシルエツトだった。眼前に迫るその草書体で刻まれた碑文が、彼がこの世で最後に見た映像となる。

世界は一家、人類はみな兄弟

「うわわっ、たっ、たっ、助け……」

ずしんと音がして、巨大な石の塊が兵士を押しつぶした。ひしゃげた手足が、変な角度で石の縁からはみ出している。

その石碑には、裏側にも別な文字が刻まれていた。

交通ルールを守ろう

その碑文をキャタピラで踏みしだきながら、総重量7トンの装甲兵員輸送車が横たわる石碑の上を乱暴に乗り越えた。

「ふひゃあ！ 鼻血、鼻血っ、鼻血が出たあーっ、もうルーダーベったら、何て運転してくれんのよお！」

石碑に激突した衝撃で顔面を強打したアシが、鼻を押さえながら座席の上でのたうち回っていた。その隣では、ルーダーベが、必死の形相でハンドルにしがみついている。

碧玉のような彼女の瞳は、獲物を狩るときの虎のように完全に据わっていた。

「アシちゃん、もう鼻血ブーで大ピンチ！ ねえルーダーベ、タンポン一個分けてえ」

「ちよつと、少しは黙ってて下さらない！ ぜんぜん運転に集中できないじゃないの」

そう苛立たしげに言いながら、ルーダーベは眼前に迫る泉水を避けるべく強引にハンドルを切った。

「きゃあ、ぶつかるっ」

「こなくそっ！」

ジャリジャリッと前タイヤが土砂を巻き上げ、後輪のキャタピラがズズズッと横滑りして流される。

この装甲兵員輸送車は、戦場での機動能力を高めるために駆動輪を戦車のようなキャタピラに替えていた。だからその気になれば、道なき道を突き進むことだって出来るし、どんなに傍若無人な運転だって可能になるのだ。

「だめだわ、避けきれない。突っ込むわよ」

「ひえええ」

けっきょく車は泉水を避けきれず、その澄んだ水を湛えるコンクリート製人工池にざぶんと突っ込んだ。その拍子に、ガーゴイルをかたどった黒大理石の噴水が倒れ、跳ね上がった水しぶきが、まるでライスシャワーみたい二人の頭上からふりそそいだ。

「やあん、冷たあい」

アシは、犬のように濡れた髪をブルブルツと左右に振ってから、自分の太ももの上でピチピチ跳ねる高級そうな錦鯉を車外へ放り出した。

「やーだ、もう、どこ走ってんのよう。絶叫マシンじゃないんだからね」

「ここは、障害物が多すぎるのよ」

「ルーダーべってば、さっきからアクセル踏みっぱなしじゃない！ちゃんとブレーキも使ってよ」

「手と足を同時に使って操作するなんて、そんな器用なこと私にはできませんわ」

「あーん、アシちゃん、やっぱり降りるうー！」

と、その時、2人の乗った装甲兵員輸送車が、バリバリツと枝を鳴らして果樹の植え込みを突っ切り、そして急に視界のひらけた場所に出た。

そこは、北の塔の正面入り口をのぞむ広大な中庭だった。

「ほら御覧なさい、ちゃんと目的地に出られたじゃないの。なんだから言ったって、私ってさすがだわ」

「たんなる偶然でしょー！」

北の塔の周りには、大勢のラゴス軍兵士がいた。

彼らは警備班長の指揮の下、等間隔に散開して厳戒態勢で警備に当たっていたのだ。

しかし、植え込みのかげから突如現れた装甲兵員輸送車が、まるで狂ったイノシシのように突進してくるのを見て、そこにいた全員が一瞬色を失った。

「ドウシタ？ 何ガアツタ？」

無線機のイヤホンから警備班長の怒鳴り声が聞こえる。はつと我に返った兵士たちは、みな手に手に自動小銃を構えながら、わらわらと車に群がった。

「侵入者ヲ発見シマシタ！ コレヨリ直チニ排除シマス」

幾つもの銃口が夜目にも鮮やかに火を吹く。

タンツ、タンツ、タンツ

「えーい、邪魔くさい」

ルーダーベは、目の前に立ち塞がるラゴス兵を2人、3人と続けざまに跳ね飛ばした。彼らは、銃を抱えたままボーリングのピンみたいに吹っ飛んだ。

「ほらアシ、あんたの出番よ。ふだん役に立たないんだから、こういう時くらい頑張りなさいな」

「あいあいさー」

アシは素早く立ち上がるとブローニングM2機関銃の銃把に取りつき、そのまま嬉々としてトリガーを引いた。途端に派手な銃撃音を轟かせ、機関銃の銃口から、まるでゴムホースで花壇に散水するみたいに弾丸がばらまかれた。

グワラララララ ！

「そ、そ、総員退避ーっ！」

駆け寄るラゴス兵は、あたかも見えない壁に行く手を阻まれたごとく、その場でバタバタと倒れ伏した。

「きやはははーっ！」

銃撃の反動でアシの金髪がぶわつと舞い上がり、スレッシヤーで脱穀された米粒のように、葉莢が景気よく飛び散った。

「……あなた、まだ鼻血が出てるわよ」

つづく……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5797d/>

チェリー・OH！ ベイビー

2010年10月13日13時38分発行